ハイ-ユニ

黒く・濃く・きれいに書ける理想のシン

そのヒミツは

理想の粒度配合

ハンドボール「第43号目次」

昭和42年6月号

表紙写真　関東学生春季リーグ日体大対教育大戦から

私のことば

来るべき大会に備え　普及と技術の向上を

福井県協会会長

伊藤仁和

本年八月末に福井県高浜町において、全日本総合選手権大会が開催され、来年昭和四十三年の第二十三回国体では同じく高浜町でハンドボール競技が行われる事になっています。

高浜町は福井県の最西端にあり、リアス式海岸の若狭湾を望む白砂青松の海水浴場として知られ、夏季のシーズンには町の人口が二十万以上になる程で特に関西方面の観光客の多い町です。

現在高浜町は来たる大会に備え、辺地の事で充分の歓迎は出来なくとも、参加選手役員の方々が心ゆくまで存分のプレーが出来る様にと、体育館の建設、グランド施設の整備、審判の養成等々町を挙げての準備に忙殺されています。

さて、この様に県内に於いて、ビッグゲームを開催する様になった福井県の協会ですが昭和三十五年の創立以来、日本協会の御指導御協力により、どうやら一人歩き出来る様になりました。何しろ最初の間は、ハンドボール競技の存在は知っていても見た事がないと云う者が多く、高校生にPRする事が手初めの仕事でした。当県協会の理事の先生方も自分が競技を先ず覚え審判技術を学び、後進を指導すると云った一人で三役も四役もしなければならない多忙さでしたが、この競技が如何にスポーツとして青少年の教育に役立つものであるかを強調し、PRに努めて来ました。

特に一年の中1/3以上を降雪等の天候不順の為、屋外スポーツの出来ない裏日本の体育強化には、屋内体育館をフルに活用出来、しかも女子にあってはドイツの例をとるまでもなく体位向上に最適であり、又機敏さを必要とするチームプレーなので協調性が若年層に培われる事等を列挙して来ました。又協会内にあっては指導者の養成と、底辺の拡充即ち将来の競技人口を増加する為の中学生に対する指導、それにとにかく対外試合に好記録を示す事が一番早道であると考え、「すべて練習は不可能を可能にする」との故小泉信三先生のお言葉をモットーに練習に努めました。しかし残念ながら昨年の大分国体にもブロック予選に敗退し、一チームも参加する事が出来ませんでしたが、福井国体での好成績を一応の目的とするが、真の目的はハンドボールの普及であり、当県のレベルアップにある事を申し合せています。その結果漸く、この弱少県にあって、一般チーム5、高校チーム14となり、中学校でも殆んどの学校で教材の中に取上げ、中体連の大会も参加校多数で開催される様になりました。

さて当県の手前味噌になりましたが、最後に日本協会の先生方に、弱少福井県で開催される本年の全日本総合選手権大会及び来年の国体が成功裡に運営出来る様、今後共御指導御協力を賜ります様お願い致し、又、スポーツ少年団、中学校体育指導要領採用問題等、地方球界の為の御指導を強化して戴く様切望致します。

関東……立教　関西……同志社が連勝

春の学生界各地で熱戦

春の学生リーグ戦は各地で熱戦がくりひろげられ、関東は立大が今シーズンもすばらしい攻撃力で全勝、3シーズン連続8回目の優勝をとげた。

関西は予想通り同大—関大の優勝争いとなったが、同大が西日本学生（4月）の雪辱をとげた。

また東海では常勝中京大が名大に敗れる大番狂せとなり、東北・北海道では東北学院大と東北大が得点率による決戦で東北学院大が辛くも勝った。このほか西南学院大が九州学生、西部大学の両選手権を握ったのが注目される。

学生界春の優勝校

▽西日本　関大（初）
▽関東　立大（8）
▽関西　同志社大（12）
▽東北・北海道　東北学院大（8）
▽北信越　富山大（4）
▽東海　名大（6）
▽九州　西南学院大（4）
▽西部　西南学院大（2）
▽関東女子　日体大（16）
▽東海女子　中京大（3）
（注）中・四国学生春季リーグは6月中旬開催。
（　）内数字は優勝回数

東北学院大が優勝

初の東北北海道春季リーグ

東北・北海道学連は今年度から春季リーグ戦を開くことになり、5月3・4の両日仙台市東北大中央体育館に6校が参加して行われた。その結果東北学院大が得点数で東北大を降し初優勝。

	得点			得点	
東北学院大	29	17—2	12—3	5	山形大
東北大	24	13—2	11—5	7	北海道大
岩手大	22	11—4	11—6	10	山形大
福島大	19	10—8	9—10	18	北海道大
東北学院大	24	12—11	12—8	19	岩手大
東北大	32	16—4	16—5	9	福島大
東北学院大	27	15—5	12—8	13	北海道大
東北大	30	12—6	18—7	13	岩手大
福島大	20	8—6	12—11	17	山形大
北海道大	18	9—12	9—6	18	岩手大（引分け）
東北大	26	12—1	14—5	6	山形大
岩手大	26	13—5	13—11	16	福島大
山形大	24	13—5	11—8	13	北海道大
東北学院大	38	19—2	19—2	4	福島大

東北学院大　8（5—2　3—6）8　東北大（引分け）

得	【学院】		【東北】	得
0	早坂	GK	若生	0
0	高野	FP	増子川	0
3	鈴木		梅津	2
0	高田		岩本	4
0	中野		内村	0
3	新田		吉村	1
0	佐藤仁		赤間	1
1	佐藤修		野村	0
1	武田		沼田	0
8	（1）	7MT	（0）	8

【順位】①東北学院大4勝1分（得点一二六）②東北大4勝1分（一二〇）③岩手大2勝2敗1分④福島大2勝3敗⑤山形大1勝4敗⑥北海道大4敗1分

（注）東北学院大は秋の優勝回数をふくめると8回目。

○……東北・北海道地区に於ける学生ハンドボール界の発展とレベルの向上に久しく計画されているのがリーグ戦の開催であった。そのリーグ戦が本年春季を第一回として発足した事は選手はもとより関係者の努力が結集された事に他ならないだろう。今後はこのリーグを基礎として当学連の発展と技術の練磨を図り中央のレベルに一歩でも近づく事になるわけである。

開催は五月三・四日仙台市東北大学体育館で行われた。

東北学連前会長木下新氏の寄贈の優勝盃を木下杯と銘打ちスタートしたわけでもある。

大会の方は各チーム共前年度の卒業生が少なく又新入生に優秀なものが加わり例年にない内容の充実した試合が行われた。東北学院大学と東北大学が優勝を争い運、不運もあって僅少の差で東北学院大が第一回目の木下杯を獲得した。

この試合、前半は新田らの巧技で学院大が5—2とリードした。後半はリードされた東北大が学院大新田を徹底的にマークし、着々とその差をつめ一進一退から時間切れ同点になり引分けとなった。

最後に次期リーグの加盟チームは今回の六大学に日大第二工学部、弘前大学（以上は学連加盟済チーム）を加え、更に秋田大学、仙台大学、宮城教育大学、北海道教育大学、室蘭工大、北見工大、東北工大らの参加が有望視され、十五チームの盛況が期待される。

（橋本種一　東北・北海道学連理事長）

★　☆　★

芝浦工大、3位に落ちる
女子は日体大連勝
二部 明大、三部 明星大

関東学生春季リーグ戦は四月三十日から五月二十二日まで、駒沢競技場で行なわれた。一部は予想通り、立大が圧倒的な強さを見せ、優勝した。芝工大が意外に振わなかったが、日体大・教育大の健闘もあり、毎日熱戦が展開された。二部は、明大・日大が強く、どちらが勝つか興味がもたれたが、実力に勝る明大が勝利を得た。女子は、日体大が連勝記録を12シーズン連続とのばしたが、辛勝したケースもみられた。力が接近してきていることを物語っていよう。

▽男子一部

日体大 29（19－7、10－7）14 慶大
教育大 14（5－8、9－5）13 早大
芝工大 35（17－6、18－8）14 法大
立大 21（15－6、6－7）13 中大
芝工大 25（9－9、16－3）12 慶大
法大 16（8－7、8－7）14 早大
立大 27（14－12、13－7）19 日体大
中大 13（8－6、5－6）12 教育大
早大 22（12－7、10－6）13 中大
立大 31（16－13、15－5）18 慶大
教育大 20（9－10、11－9）19 法大
芝工大 20（12－11、8－7）18 日体大
立大 23（12－9、11－7）16 教育大
日体大 22（11－12、11－7）19 中大
法大 18（10－7、8－4）11 慶大
芝工大 17（1－0、1－0、7－8、8－7）15 早大
教育大 24（12－10、12－4）14 芝工大
日体大 29（17－3、12－7）10 法大
中大 23（9－11、14－7）18 慶大
立大 21（12－8、9－4）12 早大
中大 20（8－9、12－6）15 法大
日体大 20（13－7、7－8）15 教育大
早大 26（17－11、9－4）15 慶大
立大 24（12－6、12－8）14 芝工大

得	【芝大】		【立大】	得
0	山村	GK	天野	0
0	高橋	GK		
2	竹内	FP	木野	8
3	小林	FP	東	2
5	近森	FP	北井	1
0	高鍬	FP	野田	4
1	山中	FP	北村	3
2	山田	FP	小野口	4
1	明石	FP	有永	1
0	奏	FP	戸田	1
0	白神	FP	倉前	0
14	（1）	7MT	（0）	24

前半12－8とリードした立大は後半に入ってもペースを守りおしきった。

立大 24（11－9、13－8）17 法大
芝工大 29（16－6、13－5）11 中大
日体大 29（16－4、13－7）11 早大
教育大 33（15－4、18－9）13 慶大

【順位】①立大7勝、②日体大5勝2敗、③芝工大5勝2敗、④教育大4勝3敗、⑤中央大3勝4敗、⑥早大2勝5敗、⑦法大2勝5敗、⑧慶大7敗（二位、六位は得点率の上位チームによる）

▽男子二部

武蔵工大 16－9 東大
明大 34－6 茨城大
日大 17－12 国士館大
国士館大 13－12 順天堂大
明大 37－5 東大
武蔵工大 25－11 茨城大
武蔵工大 18－12 国士館大
日大 24－8 東大
順天堂大 18－11 茨城大
日大 20－8 順天堂大
明大 25－7 武蔵工大
東大 22－9 茨城大
日大 19－9 武蔵工大
国士館大 25－11 茨城大
明大 22－6 順天堂大
国士館大 16－15 東大
武蔵工大 18－17 順天堂大
明大 20－10 日大
明大 27－9 国士館大
日大 27－18 茨城大
順天堂大 33－7 東大

【順位】①明大6勝、②日大5勝1敗、③武蔵工大4勝2敗④国士館大3勝3敗、⑤順天堂大2勝4敗、⑥東大1勝5敗⑦茨城大6敗

▽男子三部

東京学芸大 17－12 理科大
関東学院大 19－12 千葉工大
防衛大 38－10 上智大
明星大 32－7 理科大
関東学院大 20－8 上智大
防衛大 28－14 千葉工大
東京学芸大 15－13 千葉工大
明星大 30－15 上智大
関東学院大 28－10 理科大
明星大 16－9 東京学芸大
千葉工大 18－15 上智大
防衛大 20－8 関東学院大
東京学芸大 17－11 関東学院大
千葉工大 24－15 理科大
明星大 17－15 防衛大
上智大 24－11 理科大
明星大 15－10 関東学院大
東京学芸大 19－17 防衛大
防衛大 28－11 理科大
東京学芸大 28－4 上智大
明星大 22－17 千葉工大

【順位】①明星大6勝、②東京学芸大5勝1敗、③防衛大4勝2敗、④関東学院大3勝2敗⑤千葉工大2勝4敗、⑥上智大1勝5敗⑦理科大7敗

女子

東女体大 24—2 国士館大
日女体大 15—0 国士館大
東女体大 18—3 日女体大
日体大 7（2—4・5—2）6 東女体大

【日体】	得
GK 小野里	0
FP 北口	3
小野塚	0
強矢	0
中村	0
津熊	0
川口	1
立林	0
白土	1
隈	2

【東女】	得
GK 千明	0
FP 岡本	2
中島	1
熊谷	1
川端	0
浅見	1
矢井	0
吉沢	0
沖野谷	0
大谷	1

6（0）7MT（0）7

前半の3点差を追う東女体大の反撃は後半14分6—6に追いついた。日体大はタイムアップ寸前貴重な1点をあげ辛勝した。

日体大 9—3 日女体大
日体大 20—4 国士館大

【順位】①日体大3勝、②東女体大2勝1敗、③日女体大1勝2敗、④国士館大3敗

○……男子では、豊富な持駒に益々磨きのかかってきた立大が、予想通り、圧倒的に優勝した。昨年のメンバーがほとんど残っており、更に欧州遠征で、巧みを増した木野北村を中心にした多彩な攻撃には眼をみはるものがあった。芝工大は有力な対抗馬と目されるから、苦しい試合を続け、ついには教育大に一敗するという大きな番狂せまで生じてしまった。日体大、教育大も良く健闘し、それぞれの位置を獲得した。各校の実力は伯仲し、連日接戦が続き、ちょっとしたことで、勝敗が分けるケースが多かった。

木野、竹下をはじめとしたヨーロッパの本場帰りの選手は随所に本場仕込みのプレーを見せ、球界の発展に大いに寄与した。

二部は明大が昨秋とはうってかわった元気なプレーを見せ、文字通り圧勝した。三部は明星大、防大が優勝を争ったが、実力にやや優る明星大が優勝した。

女子は日体大が連覇したが東女体大との一戦は30秒前でふりきるというきわどい試合であり、力の差はほとんどなくなってきた。

名大、18シーズンぶりの優勝飾る
女子は中京大 安定の攻守中京大を降す

東海学生春季リーグは4月30日から開幕、男子1部6校、2部8校、女子3校が熱戦を展開した。男子1部では名門名大が15連ぱをめざす中京大を破る大番狂せを演じて33年春以来18シーズンぶりに優勝、女子は中京大が2連勝3回目の優勝を飾った。

▽男子1部

名大 18（11—3・7—4）7 南山大
愛知教大 24（13—3・11—9）12 岐阜大
中京大 35（18—3・17—3）6 愛知大
中京大 35（16—5・19—8）13 岐阜大
名大 23（14—7・9—11）18 愛知大
愛知教大 11（7—3・4—6）9 南山大
岐阜大 20（9—8・11—6）14 愛知大
名大 25（12—8・13—7）15 愛知教大
中京大 29（21—3・8—0）3 南山大
愛知教大 18（8—6・10—3）9 愛知大
名大 18（7—8・11—9）17 中京大

【名大】	得
GK 北井	0
加藤憲	0
丹羽	1
中井	3
樋田	4
加藤広	8
覓	0
坪井	2
渡辺	0
宇佐見	0

【中京】	得
GK 戸田	0
GK 有川	0
平松	0
黒川	8
柳沢	0
高見	3
鈴木	5
北川	0
杉本	1
杉山	0
足立	0

17（3）7MT（1）18

南山大 19（13—9・6—10）19 岐阜大
中京大 22（11—5・11—4）9 愛知教大
南山大 17（7—7・10—6）13 愛知大
名大 40（24—7・16—3）10 岐阜大

【順位】①名大5戦全勝②中京大4勝1敗③愛知教大3勝2敗④南山大1勝3敗1分（得点率○・三七）⑤岐阜大1勝3敗1分（○・三五）⑥愛知大5敗

▽同2部

三重大 23—15 静岡大
名城大 31—9 県立三重大
静岡大 28—23 大同工大
名城大 30—10 名工大
三重大 23—14 中部工大
滋賀大 21—18 県立三重大
名工大 28—9 県立三重大
名城大 23—19 中部工大
静岡大 26—12 滋賀大
三重大 27—15 大同工大
名城大 36—10 大同工大
中部工大 31—7 県立三重大
三重大 31—12 滋賀大
静岡大 18—17 名工大
静岡大 24—21 県立三重大
名城大 27—6 三重大
中部工大 36—13 大同工大
滋賀大 17—13 名工大
名城大 24—17 静岡大
三重大 23—19 県立三重大
大同工大 13（分）13 名工大
中部工大 34—9 滋賀大
中部工大 18—15 静岡大
大同工大 25—18 県立三重大
名工大 22—15 三重大
名城大 48—11 滋賀大
中部工大 22—11 名工大
大同工大 24—7 滋賀大

【順位】①名城大7戦全勝（初優勝）②中部工大5勝2敗（得点率○・六三）③三重大5勝2敗（○・五五）④静岡大4勝3敗⑤名工大⑥大同工大⑦滋賀大⑧県立三重大

▽女子

中京大 21（10—2・11—0）2 女松短大阪
中京女大 20（10—2・10—0）2 女松短大阪

中京大 8（4―1, 4―2）3 中京女大

【中京】		得
GK	川崎	0
	西岡	0
FP	伊藤	0
	山本	0
	石山	3
	稲葉	0
	砂浜	2
	森	3
	黒丸	0
	宮前	0
	安田	0
		8

【中女】		得
GK	中島	0
	北岡	0
FP	進士	0
	国沢	0
	都築	0
	金山	3
	野村	0
	湯浅	0
	井上	0
	鈴不	0
		3

○…名大の気力あふれた攻守が連勝まちがいなしとみられた中京大を、王座から引きずりおろしてしまった。

名大はこれといって目立つ選手はいないが、逆にそれが〝団結〟を呼び勝因となった。

中京大はGK牧が卒業したものの黒川を中心とした攻撃力は今シーズンもひきつづき抜群であり、全日本学生界でも上位といわれていた。

その過信と〝常勝〟の安易感をつかれ、苦い経験を味あわされたといってよいだろう。

○…名大―中京大戦では、名大に先手をとられながらも、前半27分9―9に追いついた。これまでの中京大ならここで試合のペースを握るのだが、そのあと2点を失い、後半12分には15―11。必死の反撃を試みたが及ばなかった。

○…このほか南山大、愛知教大など一部各校の持ち味を活かした攻守、二部の名城大、中部工大の充実が目立ち、全般的に意欲的な試合態度がみられたのはこれまでのシーズンにはないことであった。

女子は中京大―中京女大が4シーズン連続して互に首位を争ったが、攻撃力にまさる中京大が地力勝ちした。

（寛和美・東海学連委員長）

◇　◇　◇

意義ある名大の優勝

今春の学生界ほど波乱にとんだものはなかったが、なかでも東海で名大が常勝中京大の15連ぱを阻み18シーズンぶり6回目の優勝を飾ったニュースほど驚ろかされたものはない。

昨秋あたりから中京大の足もとがおびやかされはじめていたのは事実だがメンバーの質量とも他校を圧するものがあり、まだまだ当分のあいだその天下はつづくとみられていた。しかも、中京大を破るとすれば新進の愛知大、名城大ら私大勢であろうといわれていたものだ。

殊勲の名大は昭和26年部創立。28年秋からはじまった東海学生リーグでは最初10シーズンに5回優勝している。その後は中京大の抬頭で優勝から遠ざかっていただけに今回の勝利はいっそう嬉しいものであろう。

東の東大、西の京大などとともに入学の難しさでは全国屈指でメンバーを揃えるのに苦労した時期もあったがそれを克服しての栄冠は、気力によるところが多い。

一昨年春関西学連で京大が優勝を飾ったときも、攻守のバランスと精神力が勝因といわれたが、名大の場合も同じだ。

実力低下を入学難が最大因かのようにいう学生チームが多い最近の風潮に一喝を加えたような名大の優勝を賞したい（S）

富山大が3連勝飾る

北信越学生　金沢大も初の1勝

北信越学生春季リーグは5月5日富山大球技場で行われ富山大が安定した攻守で3シーズン連続4回目の優勝をとげた。

富山大 26（17―1, 9―5）6 金沢美術工芸大

金沢大 20（10―5, 10―11）16 金沢美術工芸大

富山大 19（10―6, 9―7）13 金沢大

【順位】①富山大②金沢大③金沢美術工芸大

○…攻防両面で多彩なプレーをみせた富山大の連勝は順当。

金沢美大戦では速いペースで試合を進め前半なかばで勝負をきめた。金沢大戦ではスタミナの配分をあやまり楽勝とはいえなかったが前半のリードをうまく守り切った。

加盟以来初の1勝をあげた金沢大は新人の活躍でチームのスケールが大きくなり、今後の成長が楽しみである。金沢美大は攻守のスピードに乏しく2敗をきっした。

○…各校とも昨夏の全日本学生選手権出場で、技術的、戦法的に向上のあとを示しているのはたのもしいが、トップレベルに追いつくには未だしの感が深い。

優勝した富山大にしても基本技の精進はもちろん、スピードプレーの習得を心がけて欲しい。学連一体となって中央勢との交流を積極的に進めるのが最善の策だと思う。

【若山博・北信越学連理事長】

西南、山口大破り連勝

西部大学選手権で

中四国と九州学連による第17回西部大学選手権は5月27・28日山口大経済学部グランドに15校（中四国8、九州7）が参加して開かれ、西南学院大（九州）が決勝で山口大（中・四国）を延長のすえ破り2連勝した。（詳報は次号）

▽準決勝

山口大 20―12 岡山大

西南学院大 22―8 鹿児島大

▽3位決定戦

岡山大 16―15 鹿児島大

▽決勝

西南学院大 13（5―4, 4―5, ‥, 1―0, 3―1）10 山口大

☆　☆　☆

西南学院の好調つづく
九州大を破り4連勝

第5回全九州学生選手権は5月6、7の両日福岡・九電体育館に9大学が参加して開かれ西南学院大が安定した攻守をみせ4連勝。

▽1回戦（1試合）
長崎大 37（14―8、23―9）17 福岡教大

▽準々決勝
西南学院大 30（16―2、14―2）4 長崎大
鹿児島大 25（12―6、13―8）14 福岡工大
九州産業大 23（8―6、15―8）14 熊本商大
九州大 30（9―4、21―2）6 東海大

▽準決勝
西南学院大 18（9―2、9―5）7 鹿児島大
九州大 17（9―5、8―7）12 九州産業大

▽3位決定戦
鹿児島大 16（6―7、8―7、……、1―1、1―1、引分け）16 九州産業大
抽せんで鹿児島大3位

▽決勝
西南学院大 17（8―6、9―7）13 九州大

【西南】	得
GK 奥	0
FP 位藤	2
坂田	7
分山	4
綾部	2
小島	1
安部	1
吉安	0
津田	0
上田	0

【九大】	得
GK 山内	0
FP 和田	2
福田	0
井上	0
弥登	4
平山	3
曽我	2
山根	1
西岡	0
岩本	1

17（4）MT 7（0）13

参加校は過去三連勝の西南学院大、この大会初参加の福岡教育大、東海大をむかえ鹿大、熊商大、長崎大、九州産業大、福岡工業大、九州大の九校によるトーナメントで優勝がかけられた。年々隆盛の一途をたどるこの大会も参加校も9校と今までの最高となったことは九州の学生ハンドボール界の発展に成果があった。又初参加の東海大、福教大は大差で敗れはしたものの最後まで学生らしく競技したのは称讃すべきであり敗者戦において一、二年だけの東海大が熊商大を14―12で敗ったのはみごとだった。春のこの大会は今シーズンの戦力をうらなうのに良い大会であり予想通りに、鹿大、西南大、九産大、九大の四校がベスト4に残った。三位決定戦の鹿大、九産大戦は両軍実力切迫し一点を争う好試合を展開しタイム・アップ直前産大14―14の同点とし延長戦に入った。延長戦になっても両軍一歩もひかず奮戦多数の観客をわきたたせたが勝負つかず16―16ついに抽選となり抽選勝ちで三位は鹿大となった。優勝戦の西南大、九大の試合は西南は安定した力を発揮し平均した得点力を示し冬季インカレに続きこの大会も連続優勝した。大会全体を通じ体力、脚力、シュート力の弱さが目立った。又ベスト4に残ったチームと他のチームの差はかなりあるように思われる。今回の大会を通して九州学生ハンドボール界の技術向上を望みたい。

（分山俊英・九州学連委員長）

同大、地力の4連勝（12回目）
不振の関学、5位に転落

関西学生春季リーグ戦は5月5日大阪府立大球場で開幕。同大が地力を発揮、4シーズン連続12回目の優勝。

▽男子1部
大阪経大 18（10―6、8―9）15 京大
同志社大 18（9―8、9―5）13 関学
関学 13（5―3、8―4）7 京大
同志社大 20（6―9、14―7）16 甲南大
関大 10（4―4、6―5）9 大阪経大
同志社大 28（14―5、14―6）11 大阪経大
関大 20（8―9、12―5）14 京大
甲南大 14（9―7、5―4）11 関学
甲南大 15（8―8、7―7、強分け）15 京大
関大 15（9―8、6―6）14 関学
同志社大 25（11―3、14―10）13 京大
大阪経大 15（9―6、6―6）12 関学
関大 17（7―1、10―6）7 甲南大
大阪経大 25（13―5、12―11）16 甲南大
同志社大 16（8―6、8―4）10 関大

【順位】①同志社大5戦全勝②関大4勝1敗③大阪経大3勝2敗④甲南大1勝3敗1分⑤関学1勝4敗⑥京大4敗1分

○……同大の4連勝はその地力からみて順当といえる。関大は西日本学生の時のようなシャープさがなく実力以下の試合ぶりで苦しい2位獲得だった。大経大の進境と好対照に名門関学の不振は淋しい。

関西学生春季リーグは5月23日閉幕のため詳報及び2、3部の成績は次号に掲載します。

日体大、明大両者が優勝

関東学生新人戦は5月28、29日東京・駒沢球技場で開かれ男子は日体大、明大が第2延長でも勝負がつかず両者優勝、女子は日体大が2勝（リーグ）して1位となった。

▽男子決勝
日体大 15（8―5、3―6、……、1―1、1―1、……、0―1、2―1）15 明大

▽女子リーグ
東女体大 17―2 日女体大
日体大 12―7 東女体大
日体大 15―6 日女体大

◇◇　◇◇　◇◇

日本・西独国際親善
特別委員会が発足

日本ハンドボール協会は9月に来日が決定している西ドイツのハンドボール界の代表チーム、ハンブルグ地区男女二チームの招待準備の万全を期するため、特別委員会を設け、この委員会で準備を整えることになった。

現在、各地で試合を行なうことが予定されているが、いくつかの問題点もあり、この委員会で検討を進め、一つ一つ解決していくことになった。

この委員会は「日本・西独国際親善試合ハンドボール大会特別委員会」と称することになり、本委員会で大会の大筋を決定し、実際の執行は、大筋が決定した後に設けられることになっている実行委員会が行なうことが予定されている。

委員会のメンバーは次のように決定している。

委員長　渡辺和美副会長
委　員　荒川清美理事長
〃　研場益雄常務理事
〃　若崎重富常務理事
〃　岡村昭二常務理事
〃　境井秀三常務理事
〃　浜田猪三郎常務理事

☆　☆　☆

この機会にできるだけ多くの地区で試合をし、多くの選手が参加して、本場のプレーを身をもって体験することが、わが球界の発展のためにも、個人の技術、チームの戦術の上にも望まれるところである。種々問題はあろうが、ヨーロッパ選手と試合するチャンスは多くはないのだから、多くの試合が行なわれることを期待する。

女子世界選手権はソ連で

第4回女子7人制ハンドボール世界選手権大会は1968年にソヴィエト連邦で行なわれることが決定していたが、このたび、ソ連ハンドボール協会は、11月に開催することを決定し、IHFの承認を得たと発表した。

試合はソ連内の各地で行なわれることになっており、南の黒海に近いキエフ、昔の首都レニングラードなどで開かれることになった。

専門委員の一部決定

各方面から早期の発足が望まれていた、本協会の専門委員会は、人選が各委員会で行なわれていたが、それぞれの部会で調整をはかることも必要とされ、現在、その調整が行なわれている。全部が決定しだい、誌面に掲載する予定をしている。

石切山氏を選出
北海道地区全国理事に

決定のおくれていた北海道地区選出の全国理事はこのほど石切山稔治氏（日体大出）に決まった。

これで42・43年度の日本協会全役員がでそろったことになる。

学連だより

西氏が会長に
全日本学生連盟で内定

全日本学生連盟では棚橋前会長の勇退にともない空席となっていた会長に日本協会副会長西敏郎氏（慶大OB・関東学連会長）を推すことに内定した。

同連盟では、今季の全日本学生選手権（東京）まで後任会長の決定を待つ意向だったが、球界の再編成、全日本学生選手権10周年など諸問題をひかえて会長空席では運営に支障をきたすところからこれまでの慣例にしたがい関東学連会長を会長に推すこととし、西氏を決めた。

正式には7月の全日本学生連盟会議（東京）で承認される。

全日本学生は7月11日から

全日本学生連盟は今年の第10回全日本学生選手権（女子は第3回）を7月11日から15日まで5日間東京・駒沢第二球技場で開くことになった。当初の日程は12日から16日までだった。

北海道学生界に光明

北海道の学生界は現在北大と北海道教大（釧路分校）の2校が活動しているだけだが、最近室蘭工大、北見工大、帯広畜産大などにチーム結成の動きがあり、北海道学連の独立に明かるい見通しがたっている。

☆　☆　☆

1967年を展望する（2）

意欲的な実業団、奮起のクラブ（一般男子）

一般男子

昨年はクラブ・実業団・教員それぞれに自衛隊球界と各分野それぞれに話題豊富で充実した活動を見せたが、実力的には学生界に一歩おくれをとっていることは否めない。

日本リーグ問題がとりざたされた時も『男子は学生チームの参加がなければ意味がない』という声が圧倒的だったそうだ。巻きかえしを狙うクラブ勢と伸びようとする実業団の対決が、たがいにしのぎあってレベル向上へどう結びつけるか。今年の課題といえよう。

【実業団・クラブ】氷見ク（富山）が大分国体で4位に食いこんだのをはじめ、昨年はクラブの奮起がめだった。

今年にはいっても東海室内（2月）で中京ク（愛知）が、中国選手権（5月）で菊松会（広島）が有力実業団を破って優勝している。

しかし、練習条件などハンデの多いクラブが、実業団の攻勢をいつまでささえ切れるか、一部の関係者は『時間の問題』とまでいうが、少くともクラブのなかからかつての大阪ク、桜丘会（愛知）のように学生チームと全日本の王座を争うような強豪の出現を望むことはむずかしそうだ。充実の実業団のなかでは、大崎電気（埼玉）と住友化学菊本（愛媛）宗形製作所（大阪）が他チームをリードしていると思う。

全日本実業団8連勝と国体7連勝をめざす大崎電気は地元で国体が開かれることもあり、例年以上の闘志を見せている。

昨年、学生が参加した大会で優勝したのは東京選手権だけ。全立大には1分1敗、芝浦工大とは1勝1敗である。

長身選手を入れて大型化という目標は今年もならなかったが芝浦工大から近藤、片山が入社し厚味ができた。近藤のシャープな動きが加ったのは大きい。

このほかベテラン竹野、福本（GK）を攻守の軸に北村、井上金田、西村らが健在。新監督に北村、主将に金田をすえ気分を一新しているだけに学生界のトップチームとの対決は興味ぶかい。

住友化学菊本（愛媛）も注目される。ベテランの技、若手の力をうまくとけあわせたチームカラーは、いかにも実業団の古参チームらしい。全日本総合、国体とも今年で10年連続出場だ。

エース加藤のダイナミックなプレーを主武器に北山、長嶺、松井落海、GK季原に白石（新居浜工）を加えた陣容はスキがない。

「大崎に近づきたい」といっていた目標が「大崎を破る」の決意に変わったのはそれだけの成長と自信がうかがわれる。

〃打倒大崎〃の執念なら宗形製作所（大阪）も同じだ。

久保、五味、吉川、辻に新しく北田（桃山学院大）、竹山（佐野工）が加わり試合運びの巧さは大崎におとらない。GK南も堅守。なお越智が今年から控えにまわり、要所に顔を出す作戦をとる。

レベルアップの上位陣

三強を追うグループは混戦模様でしかもレベルアップされている。

千代田印刷機製造（東京）、常盤工業（岐阜）、本田技研（三重）三菱レイヨン大竹（広島）それに新進・東海製鉄（愛知）などである。

主力の退陣から低迷していた千代田はベテランGK青木実（芝浦工大—全神奈川）らを加えたが青木孝、佐久間につづく若手FPの進境がポイント。

実業団から唯一人今春の世界選手権に参加した吉金をリーダーとする常盤は中島（益田高）ら地元の有望新人を加えて意欲的。長身高橋の攻撃力が安定すると粒ぞろいのメンバーだけにさらに躍進をとげるだろう。

本田は大下、池田、花井ら技巧派を揃えているが、ディフェンスの要（かなめ）GK本田が日体大に進学して〃守り〃に不安を残している。

実業団球界の名門三菱レ大竹は精彩をかくシーズンがつづいたが沖重、池田、兼森、GK重村らでカムバックを狙って闘志充分。東海製鉄は今春10人をこす新人を加え30人近い大世帯となり激戦の東海地区でも屈指の強チームになった。GK横江、太郎良、川瀬のほかは新人で固め、高橋、石川、竹内の名城大附高トリオと杉野（岐阜西工）らのプレーは調子づくと全国大会でも〃波乱の目〃になりそうである。

積極的になった学生OB

昨年まで実業団球界の新人といえば高校出の有力選手が主で、学生界からの加入は一部の大学OBに限られた印象が濃かったが、最近は各大学の新OBが積極的に実業団に加っている。

また、特定のルートで固めたチーム編成がみられるのも新しい傾向で法大OBによる日進商会（神奈川）、明大OBによる富士レジン（兵庫）、立大OBによる三景（東京）などはなかでも活躍の期待される布陣である。

日進は関東実業団連盟のリーダー格。村田、GK大柴に米沢（法大）が加った。堅実な試合ぶりがよい。富士は横野、小森、GK市野瀬らが中心。福本が退部したため迫力は昨年におとるが、攻守のまとまりは侮れない。

三景は田村、江名、GK尾形ら立大出の全日本選手と竹村（大阪経大）を揃えてのデビュー。一試合も行わぬ前から話題となっているチームだ。各選手が持ちあじを発揮するようだと手強い。

関東の各校OBで固めた安田生命（東京）、静岡日野自動車（静岡）は顔ぶれのわりに毎シーズンパッとしない。練習量の不足がひびいているのだろう。

着実な成長示す一群

新シーズンごとに地味ながら着実にチーム力をのばしている一群がある。盛岡市役所（岩手）、日

立製作所（茨城）、日本鋼管川崎（神奈川）、タヨシ産業、日本碍子（愛知）、三菱油化（三重）三菱樹脂（滋賀）、北陸電力（福井）、丸善石油（和歌山）川崎車輌（兵庫）、武田薬品光（山口）、日本鋼管福山（広島）らだ。クラブチーム的な生いたちから成長したこれらのチームの情熱は、ようやく軌道にのった活動を示すようになった。国体、全日本実業団でのダークホースぶりが楽しみである。

前途がますます広がる実業団に対してクラブは〝苦しい条件〟が増えている。

名門桜丘会（愛知）の鬼頭監督は『練習量が不足のうえ、大学に進学した者が帰郷しない、有力OBが実業団に入るなどあれやこれやでクラブ強化の道は八方ふさがりだ。』と悩みを訴える。今春、宿願の東海制覇をとげ、全国的にもクローズアップされた中京ク（中京高OB）の場合も、主力の安藤（光文堂・元千代田印刷機製造）、餅原（日本碍子）、深谷（三菱重工）らがいずれも所属実業団のエース格で、クラブ優先というわけにはなかなかいかない。

あるクラブの主宰者が記者に『国体一般男子の出場資格をクラブだけに限ることはできないものだろうか。いまのままでは情熱を失うばかりだ』と問いかけて来た気持ちもわかるような気がする。

しかし、氷見クの活躍に代表されるような伝統にささえられたクラブの意気がそう簡単に消沈してしまうハズはない。函館サンダー（北海道）、盛岡商友会（岩手）、東北学院大OB会（宮城）、滴水会（東京・埼玉）、AOK（群馬）、全神奈川ク（神奈川）、塩山ク（山梨）、清商ク、清水橘ク（静岡）、和商ク（和歌山）、奈良ク（奈良）佐野工ク関西球友会（大阪）、菊松会（広島）、徳山ク（山口）それに前掲の氷見ク、桜丘会、中京クらの攻守は全国的にも上位のレベル。個々のプレイヤーでは10代から唯一人全日本（五輪第一次強化選手）に選抜されている高橋（桜丘会）や突進力抜群の飯端（関学ク・世界選手権代表）、市原（菊松会）らが注目される。

大阪イーグルスが健在

【教員界】 全日本教職員6連勝をめざす大阪イーグルスを筆頭に埼玉教員、福井教員、岩手教員の国体待機組と伝統的に好選手がまとまるスワロー兵庫、山口教員団福岡教員、熊本教員、それに新進大分教員らの評判が高い。

大阪イーグルスはベテラン東をはじめ井上、青木、北岡、GK島崎ら顔なじみのメンバーが元気。スピードがなくなったといわれながら中国戦（大阪大会）でみせた試合ぶりなどは試合巧者の面目充分。北井（世界選手権代表・教大出）をエースとする埼玉教員も国体開催で張り切っている。

【自衛隊球界】 自衛隊勝田（茨城）が関東実業団2位となり、地味ながら全般に向上のあとをみせている。

しかし、質量ともに他の分野とカタを並べるには時間がかかりそうで、本部協会の指導や実業団チームの交流が積極的に推進されるべきだろう。

一般女子

実業団全盛でクラブ活躍の道はまったくとざされている。男子以上に練習環境がひびくわけだからムリもない。

新しい傾向として県単位のチーム編成がめだつ。実業団に負けまいとする若手OGの気力の結束といえる。

クラブでは城北ク（静岡）、寝屋川ク（大阪）、明善ク（福岡）ら伝統の名門があいかわらず根強い力をもっているようだが、実業団から女王の座を奪い返すことは難しい。

男女とも波乱は必至

高校界

高校スポーツほど予想のたてにくいものはない。ところがハンドボールだけはこれまで比較的強力チームの選びだしが容易で、大番狂せが演じられた例も少ない。

それがここ二、三年様相が変わり〝記者泣かせ〟になって来た。

昨年の全日本高校決勝を秋田和洋女（秋田）と花巻南（山形）で争うなどと誰が想い得ただろう。

各地に散る指導者の情熱によって地域差がなくなったことが最大因で、ミュンヘンオリンピックでの開催も大きな刺激となり発奮につながっている。

今年も波乱は必至。昨秋から今春にかけ各地の大会で古豪・名門がつぎつぎと破れ「初優勝」の文字が目立つのがその前ぶれであり裏づけである。

加盟校の増加もいちぢるしい。全国大会出場への道はけわしく、せまくなるばかりで、それを乗り切るにはいっそう基礎体力、基本技のマスターがポイントになってこよう。

男子で評判が高いのは東日本勢では昨年の覇者明星（東京）をはじめ桜台（愛知）、上田（長野）、中大附（東京）、湯沢（秋田）麻生（茨城）、清水商（静岡）、浦和市立（埼玉）、氷見（富山）。西日本勢では洛星（京都）、佐野工（大阪）、宇部工、岩国工（山口）、広（広島）、新居浜工（愛媛）、大分商（大分）、熊本市商（熊本）、それに全日本高校開催地の和歌山勢あたり。

女子では、今年も菊池農（熊本）をはじめとする九州勢が有望とされ、これを追って栃木女（栃木）城）、花巻農、花巻南（岩手）、新居浜商（愛媛）、室蘭商（北海道）山陽女（広島）、清水女（静岡）。2連勝を嵐う秋田和洋女もこれらに一歩もヒケをとっていない。

各地区のレベル平均化は男子をうわまわるものがあり、強者と目されるチームも予断は許せぬ情勢だ。

日本協会は今年からジュニア部門の強化へ積極的に乗り出すと伝えられ高校界の発展と精進を希望をもってみまもりたい。（杉山茂）

男・常盤工、女・田村紡

第3回東海実業団選手権は5月14、28日名古屋の愛知県体育館で開かれ男子（参加16）は常盤工業（岐阜）が決勝で本田技研（三重）を17―10で破り3連勝。女子（参加4）はリーグ戦の結果田村紡A（三重）が愛知紡、ブラザー工業（ともに愛知）、自社Bを連破して優勝、3連勝した。（詳報次号）

教職員大会の日程決定

昭和42年度教職員ハンドボール選手権大会は8月14・15・16日の三日間、兵庫県ハンドボール協会の主管で、神戸市中央体育館で行なわれることに決定した。

世界選手権小史

第6回男子7人制ハンドボール世界選手権は既報のとおり、新しくチェコスロバキアが王座につき幕を閉じた。ここで従来行なわれた世界選手権試合とその記録をたどってみよう。11人制世界選手権は圧倒的にドイツのものであったが、ここではかなりの入れ替りがみられる。

初回はドイツに
第一回世界選手権

第一回の男子室内ハンドボール世界選手権は1938年の2月5日・6日の両日、ドイツのベルリンにあったドイツ競技場で行なわれた。参加したのは僅かに四ケ国であった。試合は北欧勢が強いとの予想であったが、11人制世界選手権を前々年にとり、7人制にはさして力を注いでいなかったドイツが11人制をもっぱら行なっていた選手達で作ったチームで、優勝をしてしまった。

決勝リーグが四ケ国で行なわれた。結果は次のとおり。

決勝リーグ

ドイツ 11—3 デンマーク
オーストリー 5—4 スウェーデン
スウェーデン 2—1 デンマーク
ドイツ 5—4 オーストリー
オーストリー 7—2 デンマーク
ドイツ 7—2 スウェーデン

ドイツ 3戦3勝 得点 23 失点 9
オーストリー 2勝1敗 得点 16 失点 11
スウェーデン 1勝2敗 得点 8 失点 13
デンマーク 3敗 得点 6 失点 20

スウェーデン王座に
第二回世界選手権

不幸な第二次世界大戦の間、各国間の交流は全く不可能であったし、また国内の試合も非常に限られたものでしかなかった。第二回世界選手権は戦後十年の1954年に比較的戦火の影響の少なかったスウェーデンで行なわれた。

この世界選手権では、戦中、戦後を通じて、国内で多くの試合を行ない、国際交流にも積極的であったスウェーデンが、7人制独特の技術、戦術を開発し、試合にのぞみ、圧倒的な強みを見せ、開催国に栄誉ある王冠をもたらした。

第二回からは参加国も十一ケ国になり、予選が行なわれるようになった。

本大会はこの予選を通過したドイツ、チェコスロバキア、デンマーク、スイス、フランスの五ケ国に開催国スウェーデンを加えた六ケ国によって争われた。

予選（1953年11月・12月）

ドイツ 21—10 フィンランド（於 ノイミュンスター）
チェコスロバキア 13—8 ハンガリー（於 プラーグ）
デンマーク 26—11 ノールウェー（於 オスロ）
スイス 15—11 オーストリー（於 サント・ガレン）
フランス 23—11 スペイン（於 ナント）

本大会は三チームずつの準決勝リーグが行なわれ、各グループの一位の間で決勝、二位の間で五位決定戦が、三位の間で三位決定戦が行なわれた。試合は一月十三日から十七日までの五日間、スウェーデンの各地で開かれた。

準決勝リーグ

Aグループ

スウェーデン 16—8 デンマーク（於 ゲーテボルグ）
チェコスロバキア 18—13 デンマーク（於 イェンケーピング）
スウェーデン 23—14 チェコスロバキア（於 エーレブロ）

一位 スウェーデン 三勝 得点 39 失点 22
二位 チェコスロバキア 一勝一敗 得点 32 失点 36
三位 デンマーク 二敗 得点 21 失点 34

Bグループ

ドイツ 27—4 フランス（於 クリスチャンスタッド）
フランス 11—11 スイス（於 マルモ）
ドイツ 20—9 スイス（於 ルンド）

一位 ドイツ 二勝 得点 47 失点 13
二位 スイス 一敗一引分 得点 20 失点 31
三位 フランス 一敗一引分 得点 15 失点 38

五位決定戦

デンマーク 23—11 フランス（於 ベクスヨー）

三位決定戦

チェコスロバキア 24—11 スイス（於 ゲーテボルグ）

決勝戦（1954年1月17日） 於 ゲーテボルグ

スウェーデン 17—14 ドイツ

一位 スウェーデン
二位 ドイツ
三位 チェコスロバキア
四位 スイス
五位 デンマーク
六位 フランス

スウェーデン王座を護る
第三回世界選手権

第三回世界選手権は東ドイツで1958年2月27日から3月8日にかけ行なわれた。この大会には十六ケ国が参加している。

従来はヨーロッパのみの参加であったが、アメリカ大陸からブラジルの初参加を見、またこの後の世界選手権で大活躍をするルーマニアも予選で敗れはしたが、初参加している。

試合形式は全参加チーム十六を東ドイツに集め、四チームずつの予選リーグを行ない、その上位二チームずつからなる八チームを二つにわけ準決勝リーグを行ない、その一位・二位・三位・四位の間の各決定戦を行なうという世界選手権の標準方式がこの時に確立されている。

予選の試合は東ドイツの首都である東ベルリン、北海に開いた港町ロストク、南西にあるエルフルト、西ドイツとの国境近くのマグデブルグの各地で行なわれた。

第3回大会優勝のスウェーデンチーム

予選リーグ

Aグループ（於 エルフルト）

スウェーデン 31—11 スペイン
ポーランド 14—14 フィンランド
スペイン 19—16 フィンランド
スウェーデン 19—14 ポーランド
ポーランド 25—11 スペイン
スウェーデン 27—16 フィンランド

一位 スウェーデン 三勝
得点 77 失点 41
二位 ポーランド 一勝一敗一分
得点 53 失点 44
三位 スペイン 一勝二敗
得点 41 失点 72
四位 フィンランド 二敗一分
得点 46 失点 60

この結果スウェーデンとポーランドがこのグループから決勝に進出することになった。王者スウェーデンの順当な勝利であった。

Bグループ（於 東ベルリン）

ドイツ 46—4 ルクセンブルグ
ノールウェー 17—13 フランス
ノールウェー 41—8 ルクセンブルグ
ドイツ 32—12 フランス
フランス 41—8 ルクセンブルグ
ドイツ 19—9 ノールウェー

一位 ドイツ 三勝
得点 97 失点 25
二位 ノールウェー 二勝一敗
得点 67 失点 40
三位 フランス 一勝二敗
得点 66 失点 57
四位 ルクセンブルグ 三敗
得点 20 失点 128

統一ドイツチームが非常な強さを見せ、ノールウェーと共に決勝に進んだ。

Cグループ（於 マグデブルグ）

チェコスロバキア 27—17 アイスランド
ハンガリー 16—16 ルーマニア
アイスランド 13—11 ルーマニア
チェコスロバキア 26—11 ハンガリー
ハンガリー 19—16 アイスランド
チェコスロバキア 21—13 ルーマニア

一位 チェコスロバキア 三勝
得点 74 失点 41
二位 ハンガリー 一勝一敗一分
得点 46 失点 58
三位 アイスランド 一勝二敗
得点 46 失点 57
四位 ルーマニア 二敗一分
得点 40 失点 50

チェコスロバキアを除き、いずれも実力伯仲、どこがでてもおかしくないところであったが、ハンガリーが出場権を握った。この予選リーグで一勝もあげることができず、最下位で敗退したルーマニアの次の大会の優勝を誰が予想しえたであろうか。巨砲陣を養成し、国内外に多くの試合を行ない僅か三年の間に見違えるような

チームを作りあげたのである。

Dグループ（於 ロストク）

デンマーク 32―12 ブラジル
ユーゴスラビア 35―8 オーストリア
オーストリア 24―12 ブラジル
デンマーク 20―12 ユーゴスラビア
ユーゴスラビア 22―9 ブラジル
デンマーク 22―18 オーストリア

一位 デンマーク 三勝
　得点 74 失点 42
二位 ユーゴースラビア 二勝一敗
　得点 69 失点 37
三位 オーストリー 一勝二敗
　得点 50 失点 69
四位 ブラジル 三敗
　得点 33 失点 78

アメリカ大陸から初参加のブラジルはレベルの差はいかんともしがたく、いずれの国とも大差で敗れた。デンマーク、ユーゴースラビアが順当な初利を納め、準決勝リーグに駒を進めた。

準決勝リーグ

準決勝リーグは二会場に別れ、一つは東ベルリンで、ドイツ、チェコスロバキア、ノールウェー、ハンガリーが争い、他はライプチッヒでスウェーデン、デンマーク、ポーランド、ユーゴースラビアが競いあった。

第一グループ（於 東ベルリン）

ドイツ 22―15 ハンガリー
チェコスロバキア 21―10 ノールウェー
ノールウェー 23―11 ハンガリー
チェコスロバキア 17―14 ドイツ

ドイツ対ノールウェー、チェコスロバキア対ハンガリーの二試合は予選リーグの戦績がそのまま準決勝リーグに適用され、結果は次のとおりになった。

一位 チェコスロバキア 三勝
　得点 64，失点 35
二位 ドイツ 二勝一敗
　得点 55 失点 41
三位 ノールウェー 一勝二敗
　得点 42 失点 61
四位 ハンガリー 三敗
　得点 47 失点 71

チェコスロバキアの力は非常なものがあり、東西ドイツの力を合わせたドイツチームも歯がたたなかった。

第二グループ

デンマーク 22―15 ポーランド
スウェーデン 26―9 ユーゴースラビア
ポーランド 9―7 ユーゴースラビア
スウェーデン 13―12 デンマーク

スウェーデン対ポーランド、デンマーク対ユーゴースラビアの二試合は予選リーグの結果がそのまま準決勝リーグにも使用された。

一位 スウェーデン 三勝
　得点 58 失点 35
二位 デンマーク 二勝一敗
　得点 54 失点 40
三位 ポーランド 一勝二敗
　得点 38. 失点 48
四位 ユーゴースラビア 三敗
　得点 28 失点 55

スウェーデン対デンマークは実にすばらしい試合を展開して、球史に残る試合の一つになっている。

七位決定戦（於 東ベルリン）
ハンガリー 24―16 ユーゴースラビア
五位決定戦（於 東ベルリン）
ポーランド 20―18 ノールウェー
三位決定戦（於 東ベルリン）
ドイツ 16―13 デンマーク
決勝戦（於 東ベルリン）
スウェーデン 22―12 チェコスロバキア

第四回大会は本誌6号に、第五回大会は本誌17号に載せられている。

第3回世界選手権より

時評

東ドイツの七人制主力化について思う

西ドイツの国内リーグの開催というエポック・メーキングなことが昨秋におこった。これは単に西ドイツ一国にとどまらず、その反響は海外諸国に大きくもたらされた。

このニュースを追うように今回の東ドイツの七人制主力化決定である。世界のハンドボール界は現在大きな転機にたっている。転機というにはもはや遅すぎるかもしれない。一つの転換期が次の段階の完成に向って、大きく一歩を踏み出したとすべきかもしれない。

東ドイツの七人制への切りかえは、西ドイツ協会が七人制の国内リーグを開始した以上にショッキングなニュースであった。

事態はついにここまできたかという感が強い。一一人制があくまでも主体であり、ハンドボールは陽の光を十分に吸収しないで行なうものとしていた東西ドイツの協会がはっきりがら屋外とした線は必ずしも出していないが、七人制を主体とする線を出しはじめたことこれは一つの大きな動きとして捕えなければならないこととといえよう。

七人制ハンドボールと一一人制ハンドボールは発展のしかたが非常に異っており、七人制の中心はあくまでも北欧の冬季の屋内競技として発展したものであり、一一人制は夏季の陽光の上での屋外競技として発展してきた歴史をせおっている。

その歴史を背景にして、戦後の七人制の発展がはじまる。まずスウェーデンを中心として北欧、ついでルーマニア、チの発展が見ェコスロバキアなどの東欧でもられ、新興アフリカ諸国もつぎつぎに、七人制で名のりをあげる状況となった。

一一人制の世界選手権は行なわれているが次第に参加国の数はへり、しだいに衰退に向っていることは明らかである。

このような世界の情勢にかんがみ、一一人制保持にもっとも熱心であった東西両ドイツが七人制に重点を移すということは、この一一人制から七人制への転換を完成させる一つのポイントとなろう。

いち早く七人制に一本化した日本協会の当時の執行部の英断は賞されてよかろう。しかし、従来、一一人制に力を入れていた諸国が七人制に主力を切りかえたとすると、世界への道は益々厳しいものになってこよう。地理的条件その他の不利を克服し、世界に覇を称えるべく国内あげて一そうの努力が望まれる。(F)

◇ ◇ ◇

思いつくまま

第二次黄金期へ 大崎？

○…実業団チームの大黒柱・大崎電気は今シーズンから男女とも監督以下メンバーを一新した。まず男子監督の今野君が引退し、後任には北村尚英君（中京商高出）主将に金田純男君（芝浦工大出）が決まった。ところが若手の小谷内、福田、宮田の三人が退社したので、北村監督、金田、竹野、井上、西村、福本、下里、加藤、の八人に新入社員の近藤、片山（とも芝浦工大出）を加えて計十人。大崎電気の第一次黄金時代に比べて約半分の人員。北村新監督は「十人では練習試合ができない。これが悩みのタネです。でもそんなノンキなことは言っていられない。夏の全日本総合選手権大会、十二月の全日本選抜選手権大会は必ずいただきますよ。それを目標にしているんです」という。その根拠はなにか、と聞いたら「ベテランの竹野さんが健在だし、芝浦工大からノブ（近藤のこと）と片山が入社したので心強い。今シーズンの芝浦工大は、からだが小さいので、そうこわくない。だからタイトルを握るには〝打倒全立大〟あるのみです。第二次の黄金時代を築きます」とものすごい意気込み。マネジャーは田口君。

○…女子の方はどうか。主将の宇井をはじめ笠原、黒川、古谷の四人が引退し後任の主将には早川清美さん（半田高出）が選ばれた。監督は従来どおり宮原俊隆君。宇井、笠原さんの二人は近く結婚式をあげるとか。これはおめでたいニュース。新主将の早川さんは「主力がごっそり抜けてしまったので、責任は重大です。先輩たちが築いてくれた栄光をけがさないよう全員にハッパをかけています」となかなか殊勝なことをおっしゃる。ところが三月下旬横浜で開かれた第一回関東実業団選手権大会で、三菱鉛筆に4―8とダブルスコアで敗れ、シュンとしてしまった（女子は三チームのリーグ戦）。この敗戦がいいクスリとなったのか、その後の練習は火花が散るような激しいもの。「ことしは全タイトルを…」をスローガンにして、連日埼玉工場のアンツーカーのコートを走り回っている。

○…三月中旬に田村紡が熊本へ遠征し、大洋デパートと三連戦。成績は田村紡の三連勝に終わったが、元大洋デパートのエースだった西村八千代さんは「第一戦はいい試合でした。大洋にも勝つチャンスはあったのですが…。大洋は新保さんが非常にうまくなったので心強い。それにしても田村紡のスピードはすばらしい」と田村紡をほめていた。

（鷲尾武治）

☆ ☆ ☆

ボールリーグ戦より

春季関東学生ハンド

西ドイツの技術研究（最終回）

フォーメーションが基本

高度な西ドイツの技術

訳 藤本強
（日本協会常務理事）

西ドイツの技術研究はこれまで8回にわたって連載してきたが、ここでこれを終わるに当たって、いくつかの問題点を要約しておきたい。

この技術研究のレベルは、かなり高度のものといってさしつかえないと思う。

現在まで、七人制ハンドボールを解説した本は何冊か出ているが、高度のレベルに達していると考えられる本よりも、この連載記事の方がより高度のものを系統的に取り上げている。フォーメーションはもっと数多くのものが考えられているが、現在最も多く使用されているフォーメーションについて、高度の戦術が取り上げられている。

現在までに書かれた七人制ハンドボールの解説書のなかで、最も高度の技術、戦術を体系づけているのは、東ドイツのラングホフおよびムントの書いた「室内ハンドボール」（注1）と、国際ハンドボール連盟の技術・審判委員会委員、フランスのルネ・リカールの「七人制ハンドボール」（注2）である。これら二つの本よりも、高度の技術、戦術紹介と具体例が書かれている点、この西ドイツの技術研究はきわめて高度のものということができる。

ハンドボールは攻撃、守備のフォーメーションともきわめて流動的である。つねに相手の位置、味方の位置、個々の選手の能力によって大きく変化し、対応していかなければならないのは周知のとおりである。しかも刻々変化する情勢に対応していくためには、基本のフォーメーションはあっても、個々の選手の一動作一動作がきわめて大きな意味をもってくる。これは球技のなかでも、七人制ハンドボールの特色としてじゅうぶんとらえておかなければならない面であろう。

このような点から、アメリカンフットボールのフォーメーションのように確たるフォーメーションの採用は不可能でもあるし、実際的でもない。アメリカンフットボールにしても相手のディフェンスフォーメーション、オフェンスフォーメーションに対応して変化しなければならない。まして、非常に流動的である七人制ハンドボールでは、戦術をとるさいに個々の選手の技術、特色が大きな意味をもってくる。このように流動的という大きな特色をもっているハンドボールでは、フォーメーションの基礎に、各選手の十二分の技術の洗練、それを基本にした基本的なコンビネーションプレーの完成が要求されている。

以上の諸点を頭に入れ、ここでは比較的わかりやすい守備フォーメーションの整理・分類、個々の利点、弱点を取り上げ、その後にそれにたいする攻撃法および問題点の抽出を行なうこととする。

守備フォーメーション

守備のフォーメーションは以下にあげる四種類のものがある。七人制ハンドボールでは、ゾーン・ディフェンスが原則である。これはマンツーマン・ディフェンスでは攻撃のスピード、変化に対応できない点に由来している。

しかしながら、最近、特にこの二、三年来の特徴として、マンツーマン・ディフェンスが時として採用されることがある。既に世界選手権大会から帰国した役員達のメモにもあるように（先月号10～12頁）、ポイント・ゲッターの徹底的マーク、あるいは、バスケットでいうオールコートプレスのような場合には、このマン・ツー・マンディフェンスがしばしば採用される。マンツーマン・ディフェンスでプレス気味にアタックされた時に、キーパーがつなぎ役として貴重な存在となることも説かれているところである。一昨年の国際試合で、時間切れ近く、リード

されているチームがプレス気味のディフェンスをした時に、このことあるに備えていたチームのキーパーがゴールエリアから出て、得点し、ついに勝利を不動のものにしたという話もある。

これらマンツーマンのシステムが採用されるのは、特別な場合であって、今紹介した前者はあくまでも、ゾーン・ディフェンスがベースになっての変化であるし、また後者の場合はきわめて特殊な例と考えなければならない。

これらを総合すると、七人制ハンドボールでは、ゾーン・ディフェンスが大原則であることが良く納得できることと思う。しかし、このことは決して、個々のプレーヤーのディフェンス能力を軽じるものではない。いつ何時、プレス気味のマンツーマンに変るか判らないし、充分にマンツーマンディフェンスができないようでは、ゾーンの能力も低いものになってしまう。一一人制ハンドボール以上に、確実に守れるしたディフェンスの力が必要になるところはここにある。

七人制ハンドボールの守備フォーメーションの主なものは、以下に列挙する四つのフォーメーションである。

6：0防御
5：1防御
4：2防御
3：3防御

それぞれのフォーメーションには一長一短がある。また相手チームの特色（たとえばポストプレーがうまいとか、ロングシューターがいるとか）によって自己のチームの個々の選手の体力、技術によって大きく異なり、どれがいちばん完全なフォーメーションということはいえない。

それぞれのフォーメーションは流動的であり、相手の出方に応じて変化していかなければならない。したがって各チームは複数の守備のフォーメーションをもち、相手により試合の経過によって、使い分けていくのが望ましい。以下個々のフォーメーションの特色について述べよう。

6：0防御

ゴールエリア・ラインにピタリとくっついて、六人のフィールドプレーヤーが一定の間隔をもって並ぶフォーメーションである。サイドまでじゅうぶんカバーしているフォーメーションであり、サイド攻撃にきわめて強い。長身者をそろえ、その長身者の前後の動きが速い場合には、非常に有効である。ボールを持ってダッシュしてくるプレーヤーにたいしては前に出て当たり、ボールがパスされたら、直ちに元の位置に帰るのが鉄則である。この帰りが遅れると、フォーメーションが乱れる原因となる。

相手チームがサイド攻撃が得意であり、ロングシューターがいない場合には、まず採用を考えるフォーメーションである。

利点の逆が欠点となる。相手チームの全員が中央部に重圧をかけてきた場合、このフォーメーションは弱い。サイドの二人のプレーヤーが遊んで、実際には四人で守ることになってしまうからである。

ポストプレーがうまく、ロングシュートのうまいプレーヤーがいるチームには、採用すべきでないフォーメーションである。

現在かなりの国で試合に採用され、十分な効果を挙げている。将来性のあるフォーメーションと云えよう。

5：1防御

6：0防御の中央部に弱い欠点を補うために、中央に一人のプレーヤーをフリースロー・ラインに配したフォーメーションである。中央部前方に出たプレーヤーは、敵の攻撃の芽をフリースロー・ライン上でつみとる任務をもっている。この前方に配した一人によって、6：0防御の欠点は克服されてはいるが、速いパスを左右に回された場合、前方に出た選手は戻ることができなくなる。中央部をポストプレーとロングシュートを織りまぜて攻撃されると、弱点が現われる。この欠点を補うのが、現在多くのチームによって採用されている3：2：1の守備フォーメーションである。これは別名中央部に守備の連係四角形をつくる5：1防御とも呼ばれる（前方に出た一人と、やや前方に出た二人、後列中央の一人の四人でつくる四角形、これはボールの位置によって絶えず形を変える）。後列の五人のうち、中央の左右に位置するプレーヤー二人がやや前に出て、ボールの位置によってフリースロー・ラインまで出る。ボールがパスされたら原位置に戻る。後列の三人の中央にいるプレーヤーは、ポストプレーヤーに守備の重点を置く、と同時に防御の最後のトリデとして、全防御のカバーをする重要な任務をもっている。このフォーメーションの弱点は、複数のポストプレーヤーがポストにはいり、動き回る場合に現われる。

4：2防御

5：1防御でも、さきに述べた3：2：1防御でも、場合によるとこの形になる。これを固定したのが4：2防御である。二人がフリースローラインにあとの四人がエリアラインに並ぶ。これによって著しく中央部は強化される。とくに二人のロングシューターをもっているチームにたいして、守るのには有効である。中央部は強化されたかわりに、サイドは弱体となる。これはサイドにはいるディフェンスプレーヤーの技術とキーパーの技術によって、防ぐことができる。二人以上のロングシューター、二人以上がエリアにはいった場合、弱点を示すが、前述の3：2：1防御とともに、最も安定したフォーメーションである。

3：3防御

中央部を非常に強化したフォーメーションである。三人がフリースロー・ラインに、三人がエリアラインに並ぶ。このフォーメーションは別名「スウェーデン式防御」とも呼ばれる。スウェーデンが覇者であったころ、よく採用したフォーメーションで、中央部を割ることは非常にむずかしい。しかしながらサイドは大きくあいている。ここにこのフォーメーションの弱点がある。サイド攻撃が不得手のチームが相手のとき、使用するのが効果的である。またもっとも攻撃的なフォーメーションでもある。3：2：1防御の一つの発展としてとらえることもできよう。世界選手権でも、この形がしばしば現れたようである。マン・ツー・マンでこの形の場合もある。

以上のように、防御の形には、基本的に四つの形が考えられる。それぞれを攻撃する場合、それぞれの項であげた利点は決して攻めな

いで、弱点をつくのが攻撃フォーメーションの基礎的な考えとなる。

攻撃フォーメーション

通常、攻撃のフォーメーションとしては、まず本格的な攻撃にかかる前にプレーヤーをそれぞれの位置につける。基本的なのはポストに二人、サイドに二人、浮いた位置に二人のプレーヤーを配する形か、ポストに一人、サイドに二人、浮いた位置に三人を配す形である。このほかポストに三人、サイドに二人、浮いた位置に一人という形、サイドに二人、浮いた位置に四人という形もとられる場合がある。

これらの基本形のどれをとるかは、自チームの選手の技術、能力と、相手守備のフォーメーションに対応して決めていかなければならない。それぞれの選手が一定の位置についたら攻撃が開始される。この位置のとり方は基本的には、相手のディフェンス・フォーメーションに対応しているのが望ましい。たとえば、相手のディフェンス・フォーメーションが3：2：1システムをとっていた場合にはポストに一人、サイドに二人、浮いた位置に三人の攻撃プレーヤーを配置して攻撃を始める。もし相手が4：2システムで守っていたらポストに二人、サイドに二人、浮いた位置に二人のプレーヤーを配置してから攻撃を始める。

攻撃が始まったら、各プレーヤーは互いに連絡をとりつつ、守備陣を動かすように走る。つねに守備陣形と人数とを違えるような形をとっていなければならない。つまり3：2：1防御を相手がとっていたら、ポストに二人、サイドに二人、浮いた位置に二人の配置が、いつでもだれでもシュートができるように走りながら、それぞれの位置を保っていなければならない。

4：2防御を相手がとっている場合にはポストに三人、サイドに二人、浮いた位置に一人という形か、ポストに一人、サイドに二人、浮いた位置に三人という形かをとり、全員がつねにこの形を保ちつつ走り、しかもシュートがうてるようになっていなければ攻撃をしていることにはならない。

このように守備陣と同じ形をまずとり、攻撃するときには守備陣と異った形に移行する。このことによって守備陣形に乱れが生まれ、もしそこをカバーしたなら、次にまたスキをつくるというようにして、ノーマークの選手をつくりだすのが攻撃フォーメーションの基本である。

以上のような基本的な考え方に立って、攻撃フォーメーションは組み立てられていく。ここでいちばん困難なのは、攻撃側全員が走りながら常にある位置をとっていて、しかも攻撃側全員がもしボールが回れば直ちにシュートできる体勢にあるということである。これには選手の個々の投、捕、走の基本的ならびに七人制ハンドボール独特の高度の技術をマスターしているだけでなく、相手および味方のプレーに即応したプレーをマスターしていることが必要である。

時間的にも空間的にも、刻々の情勢の変化に応じ、次のプレーの予測ができるプレーヤーにならなければならない。ということは、時間的にはタイミングのあったダッシュおよびパス、シュートチャンスのとらえ方、空間的には敵の守備陣を乱す位置、シュートの打てる位置へのダッシュ、パスの修得がぜひとも必要ということである。タイミング、ダッシュの場所、この修得は攻撃のさいにどうしても必要となるものである。

まず基本的なフォーメーションをしっかりとおぼえ、タイミング、位置のとり方をしっかりと身につける。そのうえに相手と味方の動きに即応したプレーが行なえる能力、技術をチーム全員がマスターしたとき、攻撃フォーメーションをもった一流チームが誕生することになろう。ハンドボールのフォーメーションは攻撃にしろ、守備にしろ、きわめて流動的なものである。この特色を生かすためには、多くの時間をかけ、コンビネーションを完成することも重要なことである。

〔注1〕 Langhoff & Mundt "Hallen Handball" Sportverlag, Berlin 1958

〔注2〕 R. Ricard et J. Pinturault "Le Hand-Ball à 7" Bornemann, paris. 1963

◇　◇　◇

今回で、昨年来、連載してきました西ドイツの技術研究を終了します。途中編集の都合で休載したこともあり、みなさまに御迷惑をかけたことをおわびいたします。

次号からは項を新たにして、本号にも紹介しておきました、ルネ・リキャール氏の著書「七人制ハンドボール」を中心にしながら、フランスの技術を研究していきたいと考えています。

ルネ・リカール氏の「七人制ハンドボール」は海外に於いては、極めて評判の良い本です。フランスの技術については御承知の方々も多いでしょう。

西ドイツ、フランスと続きますが、他の諸国の技術もおいおい紹介していきたいと考えています。

希望のものがありましたなら、どしどし、編集部宛に連絡下されば、できる限りの努力します。

海外スコープ

国内リーグで基礎固め　レベルアップに懸命

―今秋来日の西ドイツ球界近況―

西ドイツは昨年の冬のシーズンから従来、各地で個々の地方で開いていたリーグ戦の上に、各地の優秀チームからなる国内リーグ戦を実施するようになった。これはちょうど、サッカーの日本リーグ同様のリーグ戦である。ほぼ同レベルのチームの間の対戦であり、西ドイツ国内の最高級のレベルアップに非常に役立つものであるとされている。

またこの国内リーグにもれた各チームも、国内リーグで試合することを目標にしている。そして大いにファイトをもやして試合を行なっているので、国内全体の七人制ハンドボールのレベルアップは間違いないといわれている。

国内リーグは現在、北と南の両リーグに分かれている。それぞれのリーグは8チームずつで構成されている。従来はこれらの優秀チーム相互の試合は、年二―三試合ずつであったものが大幅にふえた。毎週各地の体育館で一流チームの間のプレーが見られるので、西ドイツのハンドボールファンは非常に喜んでいる。

西ベルリン、中部ライン、シュレスビッヒ・ホルスタイン、ハンルブク、下部ライン、ラインランド、ビュルテンベルク、ヘッセン、バイエルン、ウェストファーレン、バーデン、ファルツの12地区に分れ、それぞれの地区が8ないし10チームの上級リーグをもっている。その下に中級、下級のリーグがある。それぞれの地域リーグでのチーム力の差はかなりあり、好試合もあるが、凡戦も多い。

このような状況を切り抜け、さらに優秀チーム同士の試合を数多く行ない、より強力なナショナルチームをつくる基礎づくりをしていこうというのが、この国内リーグ結成の基本的な考え方である。この国内リーグを構成しているのは、従来の有名チームがほとんどである。南と北の両リーグにはいっているのは、いずれも一流中の一流チームばかりである。

北地区のリーグには、VfT・グンメルスバッハ、ハンブルガー・SV、GW・ダンケルセン、RSV・ミョールハイム、TUS・ウェリングホーフェン、VfL・バットシュバルトオー、ポリツァイ・ハノーバー、セントゲオルク・ハンブルグが加入し、毎週末すばらしい試合を展開している。

南地区はTV・ホッホドルフ、SG・ロイターハウゼン、ライニッケント・フュクセ、TSV・ビケルノー、TV・ホッヘルハイム、SV・メーリンゲン、TSV・ツイルンドルフが加入を認められている。

北地区はライン地区の強豪、VfL・グンメルスバッハ、ハンブルクでいつでも優勝を争っていたセントゲオルク・ハンブルグにハンブルガー・SV、ウェストファーレンの雄GW・ダンケルセンなどによって優勝が争われた。

南地区はSG・ロイターハウゼン、ビュルテンベルク地区でFA・ギョッピンゲンを押え、登場しているSV・メーリンゲン、TV・ホッホドルフなどが南地区の選手権を、さらに西ドイツ選手権をねらっている。

このように、七人制による国内リーグを行なうようになったことは、単に西ドイツ一国のハンドボール界だけでなく、世界のハンドボール界にさらに大きな転機となることは確実であろう。

十一人制をハンドボールの基本的なゲームと考え、あくまでもその伝統を保持しようという意向の強い西ドイツの球界でも、世界の大勢には抗しがたいものがある。西ドイツのハンドボール界一流のスポーツ記者であり、写真家でもあるハンス・アップフェル氏をしても、十一人制の衰退は避けがたいと歎いている（スポーツ66、No. 3/4）。

このような状況下の西ドイツで、西ドイツ協会が七人制の国内リーグを始めたことはきわめて意義深いものがあろう。1960年代にはいってからどんどん進み、年々エスカレートしている七人制ハンドボールの発展に、新たな転機が訪れたということがいえよう。

というのは、この西ドイツの国内リーグ戦の開始は、あれだけ十一人制を固執していた西ドイツの球界においてさえも、ついに七人制に重点を移したことの具体的な現われとみることができるからである。七人制では、このところ好成績をあげていない西ドイツは七人制の強化を重点施策として、このようなものを打ち出してきたようにも考えられる。

1967年の世界選手権大会では、さほど振るわなかった西ドイツが、この国内リーグの成果をどのような形で生かし、きたるべき世界選手権、さらに1972年のミュンヘン・オリンピックでいかなる成果をあげるかは大いに期待される。

結局、北地区では、当初からVFL・グンメルスバッハがとび出し、終始トップを続け、一三勝一敗の成績で優勝した。二位はG・Wダンケルセンの十勝四敗、三位はハンブルガー・SVの九勝五敗であった。南地区は北地区より、接戦が続き、形成は最後まで、予断を許さなかったが、TV・ホッホドルフがその中から抜け出して、一〇勝二敗二分の戦績をもって、償勝した。二位はSG・ロイターハウゼンの一〇勝三敗一分、三位はTSV・ビルケナウの六勝五敗三分であった。VFL・グンメルスバッハは23―7でホッホドルフを破り西ドイツ選手権を猶得し、さらにはヨーロッパカップをも手にした。VFL・グンメルスバッハによりしばらく西独を離れていたヨーロッパカップは西独に帰ってきた。国内リーグの成果といえよう。

（藤本　強）

グンメルスバッハ（西独）が初優勝

男子ヨーロッパ・カップ

第8回男子ヨーロッパカップ大会は、ヨーロッパ21ヶ国の選手権（単独）チームが参加して、およそ半年にわたり各地で熱戦を展開していたが、4月28日ドルトムントでVfL・グンメルスバッハ（西独）―デュクラ・プラーグ（チェコ）の決勝戦が一万三千の大観衆熱狂のうちに行われ、グンメルスバッハが快勝、初優勝を飾った。西ドイツの代表チームが優勝したのは4年ぶり3回目。

▼決勝

VfL・グンメルスバッハ 17（6―7 / 11―6）13 デュクラ・プラーグ

得	【デュクラ】		【V・f・L】	得
0	ビチヤ	GK	ボダク	0
2	トロヤン	GK	アルベルト	1
2	デュダ	FP	シュミット	7
5	カヴァン	FP	K・ブランド	1
1	ベネス	FP	フェルドホフ	2
1	ハブリク	FP	クリエステン	1
2	サトラパ	FP	ボエルテル	2
0	ホーバス	FP	B・ミューラー	1
0	ドリカク	FP	コスネヒル	1
0	マレス	FP	J・ブランド	1
13	（4）	7MT	（2）	17

（注）D・プラーグのデュダ、ベネス、マレスらは今春1月の世界選手権優勝メンバー

▼準々決勝・準決勝の成績（2回戦制・1勝1敗の場合は合計得点の多いチームが勝ち）

▽準々決勝

デュクラ・プラーグ（チェコ）＝DHFK・ライプチッヒ（東独）
①21―10 ②9―14

ツルド・モスクワ（ソ連）＝ホンブド・ブダペスト（ハンガリー）
①15―13 ②21―19

ダイナモ・ブカレスト（ルーマニア）＝HGコペンハーゲン（デンマーク）
①24―16 ②16―21

VfLグンメルスバッハ（西独）＝RKメドベスカク・ザグレブ（ユーゴ）
①9―13 ②19―10

▽準決勝

デュクラ・プラーグ＝ダイナモ・ブカレスト
①10―7 ②15―10

VfL・グンメルスバッハ＝ツルド・モスクワ
①15―11 ②17―15

東ドイツも7人制にふみきる

各地に大きな反響

東ドイツは1968年度から11人制のハンドボールを放棄することに決定した。

1967年の第6回7人制ハンドボール世界選手権大会で、あるいは優勝するのではないかと予想されながら、準決勝リーグにも出場せずに、脱落してしまった不始末に鑑み、このような思いきった重要な決定を行なった。

このことは、1970年から四年に一度の世界選手権、1972年から四年に一度のオリンピックを合せると、二年に一度、7人制の世界選手権が開かれ、世界の眼は7人制の争覇に注がれていることを考慮に入れての決定であることに間違いない。

これは各チームの監督会議によって決定されたものであり、この決定は国内で11人制を全廃するのではなく、国内の大会、ナショナルチームの編成は行なわないということである。従来、11人制、7人制のナショナルチームを作った場合、どちらにも入る選手が多く、結局選手が疲労し、十分な練習ができないことが一つの大きな原因となっている。

このことは国際的にきわめて大きな反響を呼ぶものと考えられている。すでに1969年の11人制ハンドボール選手権の開催国になっている西ドイツ協会から大会は予定どおり行なう旨の発表があった。

西ドイツとともに11人制ハンドボール界を二分していた東ドイツのこの発表は、11人制の衰退に一層拍車をかけることになり、7人制へ一本化する日も近いのではないかと考えられている。

ハンドボールなど冬季移行せず

国際オリンピック委

IOC（国際オリンピック委員会）は、5月5日からテヘランで第65回総会を開きウェスターホフIOC事務局長は総会後の記者会見で『ハンドボール、柔道、ウェイトリフティングなどオリンピック夏季大会種目のうち室内スポーツの一部を冬季大会にうつすことは見送りになった』と語り。この総会に出席した日本の竹田IOC委員は5月15日羽田空港の記者会見で『夏季大会種目を冬季大会に移すことについては関係各国際競技連盟が反対で、IOCとしてもすでに開催の決まっているメキシコ・ミュンヘン大会の種目などは変更しない方針なので、来年の総会でこの問題が出ても実現されることはないと思う』と語った。

〔解説〕規模が広がる一方のオリンピックの打開策として夏季大会種目の一部を冬季大会に移そうという案がIOCで出たのはここ一、二年のことで、この問題を検討する小委員会が設けられた結果「ハンドボールなど室内種目が移行可能」とされた。しかし移行可能とされた各国際競技連盟が強く反対したためIOCもこの問題を御破算としたものである。

ハンドボールは一九七二年のミュンヘン大会で36年ぶりに開催が決まっている。IHF（国際ハンドボール連盟）では、あくまで夏季大会種目としての開催を熱望していたようである。（S）

球界パトロール

どうなった日本リーグ

このまま立ち消えの公算大

○……サッカー、アイスホッケーにつづいてバレーボールの日本リーグがはなやかに幕をあけたが、昨年2月の全日本実業団連盟理事会で申し合わせが行なわれたハンドボールの日本リーグ(女子)開催問題はその後いっこうに発展をみぬまま1年以上を経過している。

主唱者の全日本実業団連盟では、昨春有力チームに参加の打診をするなどかなり具体的な準備を進めていたのだが、肝じんの日本協会側との折衝までに"暗しょう"があり、そこに乗りあげたきり、というのが現状である。

○……開催への道に障害となった最大点は「日本リーグ参加チームは冬の全日本選抜に出場しない」と実連側がしていることである。

一方の日本協会は、全日本選抜を球界の最高権威の大会としたい意向が強く、出場チームをすべて協会推薦にするなど実績をつくりはじめていただけに、この実連の構想とはまったく"対立"してしまう。

実連の開催案の裏には「大会整理」があるだけに、一そう平行線を強めているのも一因だ。

○……また高嶋前理事長は在任中この問題に対して『日本リーグを開くのなら男女両方にしたい。そうでなければ、現行の全日本選抜を当分のあいだ"日本リーグ"に代わるものとして充実させたい』と話していたが、当時からひきつづきこの考えかたが今も日本協会を支配しているようだ。

現実の問題として男子の全国最上位チームは大崎電気(埼玉)をのぞいてすべて学生関係である。

学連関係の某氏は『実業団の強力チームがふえれば考えなおすこともあろうが、現状では日本リーグをつくるより、全日本学生の上位戦を決勝リーグにすることの方が先決だし、はげみにもなる』と男子の日本リーグ開催には興味を示していない。しかもこれは学生界共通の考えかたとみてよい。

○……渡辺全日本実業団連盟理事長は『こちら(実連)からはもう働きかけはしない』となかばあきらめ顔だし、日本協会の新執行陣も『慎重に検討する』というだけで、むしろ"そんな問題があったのか"といったムードさえうかがわれる。

地方の一部では日本リーグ開催を熱望する声もあるというが、どうやらこのまま立ち消えの公算がきわめて強いようである。

★★★

★★★

新連載リレー寄稿

日本ハンドボール界の課題（1）

～三十周年迎えた球界に望む～

杉山　茂

日本ハンドボール協会の創立は昭和十三年二月二日。つまりことしが三十周年に当たる。三十歳──男ならいよいよ働き盛りである。高嶋冽氏（前日本協会理事長）は「ハンドボール界ほど短期間に普及、発展した競技はない」とよく自慢していた。第二次大戦のブランクを考えれば、たしかにこれは特筆すべきことだろう。

しかし反省すべき点、改善すべき点の多いのも事実である。そこで当面した問題を含め次の四点を「三十歳の日本ハンドボール界の課題」として読者諸兄とともに考えたい。

五輪強化へ始動を

まずその第一は、1972年ミュンヘン（西ドイツ）で開かれるオリンピックにたいする準備に今年からとりかかることだ。ミュンヘン五輪にハンドボールが登場することは、世界ハンドボール界あげての喜びで、各国関係者の〝ミュンヘンへの意欲〟は高まるばかりである。

昨年八月、日本協会はミュンヘンに備える第一次強化選手男子二十八人を発表した。球界内外の反響はもとより、指名された当人たちのなかでも、けげんな気持ちを抱いていた選手が多い。「オリンピックといっても、まだ五年先のことだし……」というわけだろう。スポーツ界当面の注目は来年のメキシコ大会で、その後のミュンヘン大会に関心を引きつけることは難題だが、ハンドボール界だけは、そうはいっていられない。

たとえばＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）では、ミュンヘン大会の出場権を1970年の第七回世界男子七人制選手権（フランス）におくという提案をしていると伝えられ、これが実現すればあと三年の余裕しかない。ヨーロッパのスポーツ紙を見ていると、各国ハンドボールのジュニアチームによる国際交流が目立ってふえてきている。ミュンヘンへの始動を、そこに感じとることができるのだ。

日本協会も現有勢力の強化を企る一方〝ミュンヘンでの主役〟たちの育成を急がねばなるまい。そのためには、なによりもコーチング・スタッフの発足が先決であろう。

分けよ運営と技術部門

課題の第二は、強化指導部門（コーチング・スタッフ）の機構化に伴う協会組織の再検討である。現行規約によれば、強化指導部門は専門委員会の一つにすぎない。これからは運営と技術部門をはっきり分けてしまうべきだ。

運営部門は総務事業──つまり普及、登録、経理などを担当し、技術部門は審判（レフェリー・ソサイエティ）、ナショナルチームの編成、指導、五輪対策、技術研究を担当する。

球界のこれまでは普及（競技人口の増加、一般の関心喚起）に重点がおかれ、そのためにはトップレベルの強化も第二次的な評価にならざるを得なかった。しかし、今後は、両者同位に推進されるべきであり、むしろ「トップレベルの強化が底辺拡大につながる」考えかたに歩むべきなのである。機構改革を進め、その人選を急ぐように強調したい。

財源確保の対策を

第三の課題は、財源の確保である。これは三十年間の懸案である。いつまでも「金がない…」では飛躍の道を自ら閉ざすようなものだ。小さな単位でもよいから、協会資金を積み立てるようにしたらどうか。

また全国大会の有料入場制を徹底し、諸経費の半額も日本協会が負担し、その代わり入場料などの競技収入も、日本協会と主管協会の折半にするような方法もよいのではなかろうか。

国際試合を開いても大きな赤字を出さず収まっているではないか、とかつて反論した役員がいるが、これは地方協会の涙ぐましいばかりの努力にささえられてのことである。海外遠征にしても、個人の負担が大半だ。未熟でも金を出せばナショナルチームに加われるなどというのでは、権威もなにもあったものではない。

地方選手権の重要視

第四に地方（ブロック）選手権への積極的支援を期待したい。現在、日本協会は全国を九つのブロックに分け、それぞれブロック協会と呼ばれる組織を置いている。これらの組織の最大の活動は、全日本総合、国体のブロック予選運営、それにブロック選手権の主催であろう。

前者は既存の後援機関もあるのでともかく、ブロック選手権にたいしては、日本協会は協会杯を贈るなど積極的な支援をすべきだ。地方のチームやプレーヤーにとって〝日本協会〟の存在が、身近になることはマイナスではあるまい。

運営面ばかりではなく、競技面でも〝ブロック〟という単位を重視すべき時期にきている。国体のあり方が体協などで問題になるたび、その縮小案としてブロック国体ということばが口にされる。日本スポーツ界にとっても〝ブロック〟は現在一つの焦点なのだ。

『トップレベルの強化は日本協会で。底辺の拡充はブロック協会で』が理想ではないか。

そしてブロック別に強化委員をおいて、その強化委員が前述した日本協会の技術部門（コーチングスタッフ）に直結するのが理想である。これらの課題は、三十歳になった球界にたいして提案するのではなくむしろ、それだけの年輪を重ねたものとして当然行なってよい事業だと私は思っている。このうち一つが欠けても、ミュンヘン五輪はみじめな結果になるのではないか。関係者─とりわけ新役員諸氏の努力を期待したい。

◇　◇　◇

今年の抱負

鶴崎工高（大分）

今年は何といっても、去年の大分国体で先輩が我々に残してくれた伝統を守り、かつ九州大会、全国大会、埼玉国体出場という大目標をはたすことだ。

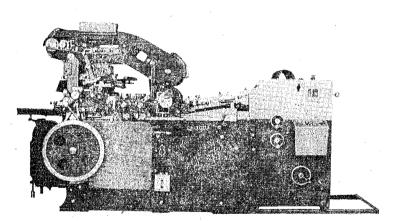
時には雨の日も、風の日も又日照りに合いどんなに苦しくきびしくても〝伝統〟守り通すのが我々の使命である。さてこの「雨」にも値する九州大会にはぜもとも県内の強敵を破り大会に出場し九州各県から選抜された強剛と合対しこれを破って優勝にこぎつけたい。次の「風」に値する全国大会、何といっても県内一位になれば出場できるのであるからぜがひでも勝たねばならぬ。最後の「日照り」に値する埼玉国体、九州一位になって去年の大分国体の経験を十二分に生かしたい。以上のように我々に残された試合はたくさんある。要するにこれからの試合は一試合毎に慎重にやりその試合の中から各人の不充分な個所を抜き出し充分実力をつけ各大会に望みたい。この幼い弱い「芽を我々の手で立派な大きなものにして雨、風、日照りにも、耐える立派なものにしたい。そしてこの芽を支えてくれる監督、先輩に対して部員一同これに感謝すると共に、さらに大きく飛躍する為にも毎日の苦しい練習に励んでいる。

（主将　小手川昭雄）

鶴崎工高

〝教　訓〟

大谷高（大阪）

「努力プラス工夫」これは部長先生が毎日言われる言葉です。特にハンドボールにおいては、ただ莫然と毎日毎日努力するよりもその場においての臨機応変なプレーが必要であると言えるでしょう。

部長先生は他チームの選手に言わせると大変こわいという事です。他チームの選手には練習中の先生しか見られないからでしょう。確かに練習中の先生には何人も近よりがたい闘志があります。そのきびしさに私達は負けてしまいそうにさえなるのです。しかし普段の先生にはそんなきびしさは一かけらも見うけられません。それどころか、私達の良き相談相手であり唯一の指針であります。

〝ハンドボールに明け暮れて苦しい練習　耐えぬいてやっと　ここまでたどり着き　それで得たのは根性さ〟こんな歌が生れました。これは先生と私達が、ガッチリスクラムを組んでいる証拠だと信じています。土を噛んでも血を吐いても最後までやり通す、そんな根性を養うために、今日も先生に見守られながらグランドを走っている、勝利と明日の自分を作るために。

四十四年度総体と富岡

富岡高（群馬）

「歳史は永き学び舎に……」。これは私たちの学校の校歌の一節ですが、この歌詞でもわかるように、我が富岡高校の歳史は古く今年で創立七十周年を迎え、ハンドボール部も創立されてから二十年になります。人にたとえれば成人式を迎える年齢です。この間、先輩たちは輝しい歴史を残しております。最近では三十九年から連続三年全国大会出場という記録を持っています。その他過去においても、私たちが誇りとする成績を残しております。又、四十四年度全国高校総合体育大会が群馬県で開催されることになりました。そのハンドボール会場が私たちのグランドに内定しております。このところ名誉ばかり続いている我がハンドボール部も、この美酒にばかり酔ってはおられません、今年もぜひ全国大会に出場し、全国の仲間と再会するため部員一同がんばっております。そしてこの名誉ある伝統を受け継ぎ、後輩へ伝えるためにも、私たちの練習は日増しに熱がはいっていきます。三年後に私たちのグランドで行なわれる全国の強豪の激戦を目に浮かばせながら。

（長谷川茂男）

富岡高

インターハイ目ざして

福井商高（福井）

我々のクラブは発足して以来六年目、発足当時はインターハイにも連続出場しましたが近年決勝戦で惜敗しては涙をのんでいます。

今年のチームは三年生が中心となり平均身長一七〇センチとそろっており、今までの雪辱をするのだとハードトレーニングをつんできました。

来年の福井国体をひかえ我県もようやく全国レベルに近ずこうとしています。全員「今年こそは」と一丸となって練習にはげみ「ハンドボール界に福商あり」と認めてもらうのだとやる気充分、ファイト満々でランニングに汗を流し、白球に若い魂と肉体とをぶっつけています。予選を後一ヶ月にし、練習は熱気を満し、毎日夜遅くまでグランド狭しと走り回っています。「もう全力をつくすだけだ。」勝利は目の前にぶらさがっている。先輩が今までに育ててくれたことを感謝し、我々の精進と努力とによって得られつつある戦績を歴史の一頁に書き込める日を皆でまっています。「さあ、練習だ。頑張ろう。」（主将　枚　秀雄）

福井商高

私の思うこと

愛知商工（愛知）

私は、中学時代からハンドボールに親しんでいます。だから運動というものは、どうあるべきかを自分自身体験によってわかっているつもりです。チームワークにしても、クラブの運営にしても、また対人関係などのむずかしさなどいろいろあると思います。それを上手にリードしていくのが主将なのです。二年生になってすぐ三年生が引退してしまいました。残された私達一、二年生全員をリードしていくために、主将という役目を授けられ、光栄で名誉でもありました。過去一年間を振り返るとさまざまな困難な問題がありました。その時このことばが私の心をささえたのです。それは『ファイト』です。どんな障害にも負けずに、今日までできました。これからも『ファイト』をもってどんなことにもぶつかるつもりです。私達三年生は、もうすぐ引退です。社会ではハンドボールに親しむ機会も少ないでしょう。少ない学生時代の最後を好きなハンドボールでかざりたいと思います。（主将　鬼頭早苗）

県大会優勝めざして

滝川高（兵庫）

私たちハンドボール部が誕生したのは四十年四月、丁度三年前でした。その間これといってめざましい記録も活躍もありませんが新興チームとして幾度か相手校を脅かした時もありました。でも伝統やその他いざという力がなくダークホース的な存在でこの二、三年が過ぎてしまいました。然しチームワークと根性の養成に部員一同連日汗を流しています。部誕生三年目、「石の上にも三年」今度こそ県大会優勝をと部員一丸となり努力しています。当県には古い伝統を持つ明石高、兵庫工高とありこのいずれかを倒した時こそ優勝も私達のものです。打倒両校いやその中一校でも倒す事です。来春初めて卒業生も出るわけです。その置土産にも初優勝をかざる事が大事です。一にも努力、二にも練習です。そしていつの日か必らずやインターハイに姿を見せます。その日もそう遠くはないでしょう。

滝川高

目標に向って前進

二俣高（静岡）

静岡県立二俣高校ハンドボール部の歴史は今年で十五年を迎えたがいまだかって全国大会出場の機会に恵まれない。毎日欠かさずグランドに姿をみせ御指導下さる川崎先生が赴任して今年で三年目、私達は希望も新たに先輩がなしえなかった全国大会出場を「必ず成し遂げてみせるのだ。」という意気で毎日砂と汗にまみれ、強い日射しのもとでの厳しい練習に耐え頑張り続けてきた。日々の練習に技術の向上を求めるのみならず私達は協力性、判断力、精神力をも求めているのです。練習が終ると必ず先生から注意をうけ反省をする「ただクラブに励むだけではだめだ、スポーツマンらしいマナーを身につけ、根性と粘りのある人間になれ、そうして精神的にも肉体的にも体を鍛えるのだ。」すっかり暗くなっているグランドでは厳しい特訓、膝に血がにじみスタミナが消耗しクタクタになっていても歯をくいしばって……。新入部員を迎えた現在、一致協力して県大会出場は勿論の事、全国大会出場を目指して一層練習に励み、二俣高校の為にももう一歩前進した人間になるように今後も協力しあって一生懸命頑張り続けたいと思います。（主将高良幸保）

二俣高

われわれのクラブ生活

室蘭商高（北海道）

室商ハンドボール部が誕生したのは昭和三十四年顧問の松田徳之助先生が着任されてからです。その頃は現在私達の使っているような立派な練習場所はなく、運動場の隅や空地で練習し、雨天の時にはその狭い空地をより練習しやすいものにと石を拾ったり、土を運んだりして整地したと聞いています。

このようにしてグランドをボールを愛した先輩のお陰で私達は今、思い切り走り回わることが出来ます。部員は現在十六人ですが平均身長は特別高いほうではありませんので今年からは走って点をと云う方針です。

雨天の後はすべり、風の強い日はボールが流されパス・キャッチミスも少なくありません。毎日の練習を終え家路に着く頃には疲労こんぱい、夕食後は熟睡だけです。こんな日の連続です。私達は現在のクラブ生活の中から、「何か」を求めて将来の社会に貢献できる健康な人間……として育っていきたいと思っています。

連載第32回

ハンドボール球史

〜7人制の足跡〜

「11人制」をまったく知らない若いハンドボール選手が増えた。

『僕たちのころは……』と11人制時代を〝解説〟する先輩の熱弁を聞いても彼らにはピンと来ない「7人制」の急激な発展は「11人制」の存在すらを忘れさせようとしている。

近代スポーツの魅力を備えた「7人制」であってみればこれはまた当然のことかもしれぬ。球史は今回からわが国における7人制の歴史と球界のメェイン・エベントになった全日本選抜の前身全日本総合室内選手権の記録をたどってみることにした。

7人制——いわゆる室内ハンドボールの競技規則が制定されたのは第二次大戦後と思っている人が意外に多いが、一九三六年(昭11)すでに国際化され、その二年後には第1回世界男子7人制選手権(優勝・ドイツ)が開かれている。

一九三六年といえばベルリンオリンピックでハンドボール（11人制）が行われた年。一九三八年といえば第1回世界男子11人制選手権が行われた年だ。（いずれもドイツ優勝）

つまり、国際的には7人制も11人制とまったく同時にスタートが切られているわけである。

日本へも、昭和9〜12年の間に11人制とともに7人制規則が伝えられており、外山准二氏は『最初のルールブックには両方とも翻訳されていたハズだ』という。

にもかかわらず、戦前の国内ハンドボール界で11人制のみが行われ普及されていったのは、昭和15年東京で開催が予定されたオリンピック大会のハンドボールが11人制と決められていたからにほかならない。そして、それはいつしか7人制の存在を忘れ、知らないところにしまいこむことになった。

北欧で早くから人気

ヨーロッパにおける7人制の普及はハンドボールの本家ドイツよりもスウェーデン、デンマークなどで著しいものが見られた。

その背景は地理的条件にもよるが、これらの国では室内スポーツとしてのハンドボールのスリリングな魅力を当時から高く買っていたといってもよいだろう。

屋外のダイナミックさもハンドボールのすてがたい〝味〟であったが、見る側にとっては室内のスピード感の方がはるかにアピールする。

IHF（国際ハンドボール連盟）などでは、観客を集め得るという点で、早くから7人制の将来に期待をかけていたようで、第二次大戦後初の公式国際試合として一九四五年(昭20)八月、11人制で行われたスウェーデン—デンマーク戦は二千六百人の観衆を集めたにすぎなかったが、翌一九四六年六月戦後最初の7人制公式国際試合として行われた同カードには四千六百人のファンがスタンドを埋めた——とその公報でも伝えている。

ところで、戦後の日本球界に7人制が話題となりはじめたのは昭和27年頃のことである。

27年9月IHFへの復帰が決まり、同時に最新ルール・ブックが送られたり、ヨーロッパ球界の消息や動向がもたらされたわけだが、関係者の耳目をうばったのは〝7人制の発展〟であった。

日本では27年ごろから

このため日本でも早急に7人制の研究と普及を進めることになり各地で講習会がもたれた。

その反響は「スピードがあって面白い」「スポーツは陽光のもとで行うものだ」など賛否まちまちだった。11人制の普及が頭うちになっていた時でもあり「日本のハンドボールが国内のメジャー・スポーツに伸びるのは7人制以外にない」とする急進派も生まれた。

しかし、国際的には11人制が主体であり、世界選手権も11人制は一九四八、五二、五五年と開かれたのに対し、7人制は一九五四年になってやっと行われるなど、ヨーロッパ球界から遠くはなれた日本が、一気に7人制を主と割り切るのはむずかしいことであった。

一方、蒔かれた種は順調に伸び特に大阪を中心とした関西、近畿地区での成長がめざましかった。

戦後いちはやく軌道にのった活動をみせた関西地区が、7人制でも〝東〟をリードしたわけだ。大阪府立体育会館など7人制のできるコート（40×20＝当時の規定）があったことも見のがせない。

国内最初の公式戦

記者のメモにまちがいがなければ国内最初の7人制（室内）公式大会は昭和28年2月15日大阪府立体育会館で開かれた「第1回関西室内大会」であろう。

この大会は一般男子は関西大会、高校男女は大阪大会、中学男女は近畿対抗というサブタイトルがつけられていた。このうち高校は当日までに各高校コートを使って1・2回戦が終了している。組み合せをふりかえってみると、男子の第1戦は富田林高—堺工、女子は桜塚高—豊中高である。厳密にいうとこの両カードが国内最初の公式7人制試合になるわけだ。（当時の詳細をご存知のかたは編集部まで御一報くださるとありがたい）

このあと関西地区では各種の7人制（室内）大会が開かれたが、中でも28年6月の西日本学生室内トーナメント（大阪府体・優勝大阪歯大）は学生界の7人制初大会として記憶されてよい。

29年12月に全日本室内

各地における7人制への関心は月日とともに高まり、日本協会では29年12月に初の全国大会として「全日本総合室内」を大阪で開くことになった。

既存の全日本総合（11人制）と同よう普及第一義とし参加資格はオープン。そのため大阪周辺のチームが大挙してエントリー男子参加28チームのうち関西地区以外からの参加は日体大、芝浦工大、東

大（以上東京）、熊本ク（熊本）の4チームにすぎなかった。

高校OBを中心としたクラブチームが多数参加したのは、チーム構成が7人ですむこと、練習場がせまく確保しやすいことなど「7人制（室内）の利点」が充分に活かされたものであろう。

熱戦の結果ベスト・フォアは関東の学生勢2と、大阪のクラブ勢2という色分けとなり日体大が一般球界の強豪大阪クを大接戦のすえ降して初のチャンピオンチームとなった。注目されるのは六陵ク（大阪・北野高OB）の3位入賞である。

11人制の全国大会ではまったく実績のない同クラブが勝ち進んだのは、7人制（室内）が11人制とは根本的に異るタクテイスを必要とする競技であることを示し、第1回大会の時点で早くもこのような傾向をもつチームが登場したことに非常な興味がもたれる。ちなみに西ドイツでは現在でも屋外協会と室内協会が併存しそれぞれのナショナルチームを編成、活動している。女子は春日丘ク（大阪）が全試合シャットアウト勝ちという快記録で優勝。

【第1回全日本総合室内選手権＝昭和29年12月26日〜28日・大阪府立体育会館】

▽男子1回戦

神戸ク（兵庫） 7－2 都南ク（大阪）
尚和ク（大阪） 9－3 O・D・C（大阪）
新生ク（大阪） 10－2 池田高ク（大阪）
熊本ク（熊本） 8－4 春日丘ク（大阪）
桃陵ク（大阪） 13－4 高津高ク（大阪）
京都学芸大（京都） 11－3 大市工高ク（大阪）
佐野工ク（大阪） 15－4 都島工ク（大阪）
浜寺ク（大阪） 11－10 奈良ク（奈良）
六陵ク（大阪） 14－2 東大（東京）
住吉ク（大阪） 8－7 豊中高ク（大阪）
全関大（大阪） 15－9 生野ク（大阪）
鳳高ク（大阪） 26－3 淀高ク（大阪）

▽同2回戦

大阪ク（大阪） 12－1 神戸ク
新生ク 13－4 尚和ク
桃陵ク 10－8 熊本ク
芝浦工大（東京） 13－3 京都学芸大
全大阪歯大（大阪） 13－3 佐野工ク
六陵ク 9－4 浜寺ク
全関大 6－2 住吉ク
日体大（東京） 11－2 鳳高ク

▽同準々決勝

大阪ク 12－1 新生ク
芝浦工大 19－7 桃陵ク
六陵ク 8－6 全大阪歯大
日体大 11－2 鳳高ク

▽同準決勝

日体大 8（3－3、5－2）5 六陵ク
大阪ク 14（6－3、8－2）5 芝浦工大

▽同3位決定戦

六陵ク 11－7 芝浦工大

▽同決勝

日体大 9（6－4、3－4）8 大阪ク

【日体大】		【大　阪】
小野秀雄	GK	高　倉
狩野幸介	FP	朝　日
皆川茂夫	FP	中　出
柳沢民弥	FP	田　原
山本孝男	FP	村　田
金原　至	FP	渡辺一
浅野克彦	FP	渡辺忠
幸田末之	FP	今　西
33	ST	29
21	FT	14

▽女子1回戦（3試合）

カリカチュア・ク（大阪） 2－1 尚和ク（大阪）
都南ク（大阪） 5－0 豊中高（大阪）
春日丘ク（大阪） 6－0 大谷ク（大阪）

▽同準決勝

カリカチュア・ク 2（1－1、1－0）1 都南ク
春日丘ク 5（1－0、4－0）0 梅花学園（大阪）

▽同3位決定戦

梅花学園 3－2 都南ク

▽同決勝

春日丘ク 6（4－0、2－0）0 カリカチュア・ク

【春日丘】		【カ倶】
永籔　洋子	GK	鍵　田
桑崎　久子	FP	岡　村
石川しずか	FP	西　山
日下　玲子	FP	長　谷
古家　豊子	FP	沖　永
向井　菊代	FP	北　林
西川佳代子	FP	三　宅
20	ST	7
14	FT	17

第1回大会の評判は上々で、新しい室内スポーツとしての声価を高めたが、それまでに刻んだ11人制の歴史を一気に書きかえることは、いぜんとしてムリであった。

しかも昭和31年西ドイツ、35年ルーマニアと世界を二分する強豪チームが11人制で来日し、日本協会の方針はあくまで11人制が主7人制が従。球界の主流たる学生界高校界の大半のチームも「11人制のシーズンオフ・ゲーム」として親しむ程度で、7人制の〝面白さ〟を認める気持ちとウラハラな傾向がつづいた。

そうした情勢に変化がおきる時が来た。昭和32年の女子11人制全廃がそれである。

すべての面で国内女子界の〝伸び〟は好ましくなかった。その打開策として7人制一本化の勇断がくだされたわけだ。

効果はすぐ現れた。実業団の誕生、クラブ（OG）の増加…。

一方、ヨーロッパでも男女を問わず7人制の勢力が11人制をおびやかしはじめていた。

世界選手権の人気も7人制が圧倒的であり、はじめから11人制を捨てる国も目立って来た。

日本協会の態度も主従の比重が平衡からしだいに7人制が主へ傾きはじめ、ついに昭和38年から男子も7人制に踏み切ることとなった。23年にわたる11人制の歴史は静かに閉ざされ、すべての大会は新しいページを開くことになった。

その結果女子の時と同よう実業団が生まれ、高校界が拡充され、学生界が発展した。

これらはすべて一本化の生んだ成果である。

日本ハンドボール界30年のうちわけは11人制時代16年、両立時代9年、7人制時代5年となる。

〔注〕優勝メンバーのみフルネーム。当時はFPをFB、HB、FWに分けて発表していたが後年との関係でFP一本にまとめた。

【次号は全日本総合室内第2回以後の記録】

地方協会告知板……東京都協会

理事長に佐野和夫氏 競技部など五部新設

都協会は四月二十二日、五月十五日に理事会を開き、本年度の新役員その他について協議した。五月二十二日の理事会で佐野和夫氏（都立秋川高校教諭）を全員一致で推薦、同氏はこれを受諾した。また本年度から担当部門を明確にするため、競技、審判、総務、渉外、財政の五つの部を設けることになった。理事会議事録は次のとおり。

一、本年度新役員の件

別表のように正式決定した。担当部門を設置し、部長、副部長を決めた。

一、渡辺会長の日本協会副会長就任の件

日本協会は同協会副会長に渡辺和美会長を推薦してきたが、渡辺会長は「私が日本協会副会長を兼ねると、評議員の資格に疑義を生じる。つまり執行機関と議決機関にはいることになる。そこで私は評議員会にたいし、臨時措置として二つの機関を兼ねてもさしつかえないむねを確認してもらう。評議員会がこれを了承すれば、私は日本協会副会長を受諾する。外山氏が都協会の副会長になったので、私の代理として評議員会に出席させることができる」と述べた。

一、西ドイツチーム来日の件

西ドイツ男女チーム（ハンブルク選抜）が九月八日から二十二日まで来日する。私は西ドイツチーム来日の準備小委員会の一人に選ばれた。東京都協会としても全力をあげて協力する。大崎電気の男女チームは責任を持って引き受ける。また西ドイツとの対戦を希望しているのは中大（男子）、三菱鉛筆（女子）である。私は千代田印刷機（男子）芝浦工大（男子）立大（男子）日体大（男女とも）東京重機にも協力を要請する。さらに日本協会と協議して全日本ナショナルチーム（男女とも）とも対戦させたい」と述べた。

一、地区協会設立促進の件

都協会は市区町村単位に協会を設立することを決めた。とりあえず五市十三区に呼びかけることになり、都協会の役員が責任者となって関係各方面と打ち合わせることにした。

今月号から「地方協会告知板」を設けました。御利用下さい。原稿のあて先は日本協会編集部。なお、紙面の関係で短かくさせていただく場合もあります。

役員名簿

会長　渡辺　和美（大崎電気工業株式会社社長）
副会長　古賀和佐雄（千代田印刷機製造株式会社社長）
　数原　洋二（三菱鉛筆株式会社社長）
　山岡　憲一（東京重機工業株式会社社長）
　外山　准二（日本通信建設株式会社）
　宮田豊太郎（都立北園高校校長）
理事長　佐野　和夫（都立秋川高校教諭）
常任理事　猪狩　武春（三菱鉛筆総務部長）
　今野　邦彦（大崎電気工業）
　鴛尾　武治（共同通信社整理部次長）
　岡前　義春（都立五商教諭）
　大塚　文雄（都立神代高校教諭）
　近藤　金博（東京重機工業）
　島田　正士（都立北多摩高校教諭）
　田中　秀夫（中大勤務）
　深美　成男（都立千歳高校教諭）
　松田　利秋（品川区立荏原一中教諭）
　渡辺　慶寿（都立久留米高校教諭）
理事　安藤　純光（法政大学助教授）
　池田　鉄哉（三菱鉛筆）
　大迫　末司（武蔵野市立三中教諭）
　岡村　千春（都立小平高校教諭）
　古賀健一郎（千代田印刷機製造専務）
　香積　見一（杉並区立井荻中教諭）
　塩川　安賢（レナウン工業）
　津島　達郎（墨田区立向島中教諭）
　中沢　重夫（芝浦工大助教授）
　中野　偉夫（武蔵工大付属中教諭）
　永井　勝雄（都立両国高校教諭）
　中村　光子（北区立豊島中教諭）
　平地　英正（武蔵野市立四中教諭）
　宮原　俊隆（大崎電気工業）
　山野　圭三（江東区立深川五中教諭）
　山内　英子（中野区立中央中学教諭）
　和田ちとせ（日立製作武蔵工場）

機構

部	役職	氏名	氏名
〔競技部〕	部長	田中秀夫	
	副部長	今野邦彦	大塚文雄
〔審判部〕	部長	岡前義春	
	副部長	近藤金博	深美成男
		渡辺慶寿	
〔総務部〕	部長	鴛尾武治	
	副部長	島田正士	岡村千春
〔渉外部〕	部長	猪狩武春	
	副部長	香積見一	岡前義春（兼任）
〔財務部〕	部長	古賀健一郎	
	副部長	松田利秋	

第19回総合選手権 福井県高浜市で

第19回総合選手権は福井県ハンドボール協会の主管で、8月22日(火)～26日(土)の5日間、大飯郡の高浜中学校グランドで開催される。

男子は後に記す参加資格のある三二チームにより、女子は参加する意志のあるチームによって、優勝が争われることになっている。

男子の三二チームには、例年どおり予選もしくは推薦によって選ばれたチームが出場する。

(1) 地区予選を通過した地区代表チーム……12チーム

地区	都道府県名	チーム数
北海道	北海道	1
東北	青森、岩手、宮城、山形、福島、秋田	1
関東	群馬、山梨、茨城、千葉、東京、栃木、神奈川、埼玉	2
東海	愛知、静岡、三重、岐阜	2
北陸	新潟、長野、石川、富山	1
近畿	滋賀、京都、大阪、奈良、和歌山、兵庫	2
中国	岡山、広島、鳥取、島根、山口	1
四国	香川、徳島、高知、愛媛	1
九州	宮崎、鹿児島、佐賀、長崎、福岡、大分、熊本、沖縄	1

(2) 学生代表チーム……9
(3) 実業団代表チーム……4
(4) 開催県代表チーム……2
(5) 日本ハンドボール協会から推薦されたチーム……5

学生、実業団代表チームは6月10日までに協会に推薦することになっている。

地区代表・開催県の代表は7月10日までに協会に報告することになっている。

これらのチームにより華々しい好試合、好プレーがあちこちで見られるよう期待している。

青森県協会地名変更

青森市合浦町二の九の十五
青森商業高校内

おわびと訂正

42号5頁5段すずぎ・たけお→すずぎ・たつお、7頁3段古賀洋二→数原洋二、数原健一郎→古賀健一郎、24頁1段目宮下宮実は宮下忠憲氏のそれぞれ誤りでした。つつしんでおわびし、訂正いたします。

☆　☆　☆

各地の記録

寄稿歓迎

高校・宇部工と山陽女 菊松会、一般に2連勝

第12回中国一般、第18回中国高校選手権は5月5、6日広島の甘日市高、広島工大附高などを会場に、中国5県から一般男子11、高校男子16、同女子15チームが参加して開かれた。

注目の高校男子はベスト・4を山口勢が独占したが、準決勝で優勝候補の岩国工を破った宇部工が決勝でもまとまりのあるプレーで下松工を降し5年ぶり2回目の優勝を飾った。同女子は今年も山陽女(広島)が圧倒的に強く3連勝5回目の優勝。

実業団の充実で伯仲の一般男子は菊松会(広島)がエース市原(広島商大出・元大崎電気)らの活躍で混戦を切りぬけ2連勝した。

▽高校男子1回戦
下関中央工(山口) 28―2 玉野(岡山)
三原工(広島) 13―5 浜田水産(島根)
尾道(広島) 15―4 境港(鳥取)
下松工(山口) 12―11 操山(岡山)
岩国工(山口) 19―15 広(広島)
松江工(島根) 14―7 津山商(岡山)
倉敷商(岡山) 29―8 修道(広島)
宇部工(山口) 18―4 境(鳥取)

▽同準々決勝
下関中央工 11―8 三原工
下松工 19―15 尾道
岩国工 11―10 松江工
宇部工 9―8 倉敷商

▽同準決勝
下松工 12（6―3、4―7、1―0、1―1）11 下関中央工
宇部工 10（4―2、6―3）5 岩国工

▽同決勝
宇部工 13（4―2、9―2）4 下松工

▽高校女子1回戦
真備(岡山) 5―1 下関西(山口)
岩国(山口) 12―0 白木(広島)
井原(岡山) 14―2 境(鳥取)
山口中央(山口) 7―6 島根農大付(島根)
松本女商(広島) 18―2 西大寺(岡山)
松江女(島根) 17―8 金川(岡山)
進徳(広島) 12―10 徳山(山口)

▽同準々決勝
山陽女(広島) 14―2 真備
岩国 9―5 井原
松本女商 7―3 山口中央

進徳 6−2 松江女

▽同準決勝

山陽女 10（4−1, 6−3）4 岩国

松本女商 5（1−1, 4−3）4 進徳

▽同決勝

山陽女 12（6−4, 6−3）7 松本女商

▽一般男子1回戦

広島商大（広島）18−11 宇部工専（山口）

出光興産（山口）19−12 日新製鋼（広島）

山口教員団（山口）22−13 日本鋼管福山（広島）

▽同準々決勝

菊松会（広島）34−20 広島商大

岡山教員（岡山）19−11 出光興産

武田薬品光（山口）34−21 広島大（広島）

三菱レイヨン（広島）24−12 山口教員団

▽同準決勝

三菱レイヨン 18（10−8, 8−6）14 武田薬品光

菊松会 棄権 岡山教員

▽同決勝

菊松会 20（10−9, 10−7）16 三菱レイヨン

充実の東海製鉄連勝

▼第9回愛知県実業団リーグ（4月・名古屋）＝男子のみ

▽1部

東海製鉄A 30−11 東洋レーヨン

三菱重工 18−13 大同製鋼

日本碍子 26−17 東洋レーヨン

東海製鉄A 27−11 大同製鋼

三菱重工 20−18 東洋レーヨン

日本碍子 24−17 大同製鋼

東海製鉄A 26−13 日本碍子

大同製鋼 17−12 東洋レーヨン

三菱重工 17（分）17 日本碍子

東海製鉄A 26−14 三菱重工

【順位】①東海製鉄A 4戦全勝＝2連勝3回目②日本碍子2勝1敗1分（得点80）③三菱重工2勝1敗1分（69）④大同製鋼1勝3敗⑤東洋レーヨン愛知4敗

【2部順位】①東海製鉄B 5戦全勝②タヨシ産業3勝2敗③光文堂④中部電力⑤ブラザー工業⑥昭和染工

▽一・二部入れ替え戦

タヨシ産業（二部）21−16 東洋レーヨン（1部）

タヨシ産業は1部昇格

横浜東高が初優勝

▼神奈川県春季高校選手権（5月・横浜）

▽男子準決勝

関東学院 11−7 相模台工

横浜東 12−11 希望ヶ丘

▽同決勝

横浜東 11（5−2, 6−2）4 関東学院

東高は初優勝

▽女子決勝

市立川崎 7（3−0, 4−2）2 南

市立川崎高は2年ぶり4回目の優勝。

本田技研が楽勝

▼三重県春季選手権（4月・津）

▽一般男子準々決勝

本田技研 14−6 三菱油化

愛球会 25−5 鈴鹿工専

大協石油 24−13 県立三重大

鵜の森ク 23−16 教員ク

▽同準決勝

本田技研 29−10 愛球会

鵜の森ク 16−10 大協石油

▽同決勝

本田技研 23（15−3, 8−5）8 鵜の森ク

▽高校男子準決勝

四日市工 17−6 四日市商

高田 16−1 津工

▽同決勝

高田 9（6−4, 3−3）7 四日市工

▽高校女子準決勝

松阪女 25−5 菰野

暁 3−2 四日市

▽同決勝

暁 9（5−3, 4−3）6 松阪女

女子で貴和高勝つ

◇和歌山県春季選手権（4月・和歌山）

▽男子準々決勝

桐蔭高A 17−11 丸善石油

和歌山商 12−4 御坊商工

住友金属 16−12 和歌山大

那賀高 21−19 和商ク

▽同準決勝

桐蔭高A 13−6 和歌山商

那賀高 13−8 住友金属

▽同決勝

桐蔭高A 10（0−4, 5−1 … 2−0, 3−0）5 那賀高

▽女子1回戦（参加3チーム）

貴和高 9−5 和歌山商

▽同決勝

貴和高 9（2−2, 4−4 … 1−2, 2−0）8 和商0G

福岡教員、西南大を破る

◇福岡県選手権（4月・香椎）

▽男子準決勝

福岡教員 33−13 香椎ク

西南学院大 23−14 西南ク

▽同決勝

福岡教員 18（11−6, 7−9）15 西南学院大

今月号から「地方だより」を「各地の記録」と改めましたこれまでと同じように御寄稿をおねがいします（編集部）

編集後記

今月号は学生の春季リーグ戦をおってみた。各地々々の試合を見ていると、どの地区も多党化時代に入ったような気がする。

従来非常に強いと前評判の高かったチームが、敗れたり、辛勝したりしている。全部このような傾向があるのかどうか。実力が接近してきたのは喜ぶべきことであろうか、一番高い力のチームに他のチームが追いつき、多党化したのか果してレベル・アップしての多党化なのだろうか。より高いレベルでの試合が各地で行なわれることが望まれる。

ヨーロッパにも、7人制の波がふきまくっている。西ドイツの7人制国内リーグの設置に続いて、11人制の雄、東ドイツが7人制に切りかえるというニュースが入ってきた。大きな壁が落ちた感じである。このことによって、益々7人制の普及は発展するであろうし、11人制の維持は全く困難になってくるであろう。ハンドボールも大きな曲りかどにさしかかっているのは間違いあるまい。

西ドイツ招待も準備委員会が作られ、進みはじめている。試合に多くの人が参加し多くの人が観戦し、成功裡におわるよう努力しよう。（T.S. F.）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第四十三号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十二年五月二十五日印刷 昭和四十二年六月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三二一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 鈴木達雄
定価百五十円